源氏瓜子

上

壱冊

凡例

一花月の序云あづまぶりの詩をまなぶ人をも
きぶ集をまなぶ中よりあとをたるべきぶ。これと
ありき水ハ山あるべきことにたるべきぶ。
くちなしのぶ山ぶけだいよりくまんとまうす。我國の
和歌の源氏物語よりたるべし。これは
ちかきてぶこのまそあそびぶとありて。花月の
情をあらはす。家この注釋まちくまして。書
蘭の珊をつむとゝへどもぶ。ぶ。のかぶ八河海抄
いかゝ八今をつむべへ。ありきあるこれをまろてこと。
まもる扶中れもれよりちひて。扶南の通をえ

ちりぬるはあれど第の海まもりてあり
れうの興をまり。恒の樹まがてくいぎ
まるの兎よあへうのこれる紙ひろひあやまち
をあくこしりへ。先達の書ざにそむりざれど。
後生のことばづかんぞきざんやつる
は愚眼のとうぶ正法華経ひのべて花名餘
情とんづることろまりあり
一宇治の大納云物語云今いまり。越前守為
時とてさえるこ世にめてくやさりけるへ
ぬ。ことこ式アがあやもこの為時。源氏ゆり

ゆるあり。こはくもあらこと。ぞを。ぬ。まあにくも
ありけっとぞ。ぞさいの文これと紙写合てぬ。
生あ紙ありいぐ。ゆりけっぬ。源氏ゆりうう
ことさ。ぬぐ。ゆつうへりまいりてのちゆく
つまうとも。ゆづれくまうとちゅん
一順徒院御記 義久二年一切物語雖多或有良或
泥土也伊勢物語ハ。詞拙事ちをれ。ぬ。ぬ。
ゆめさ。詞拙也。大和ハ多下ゆ劣其外奇
物語盡を不見名其詮之なを。源氏物語ハ。
不可説物也更非俗人之所為業式アを書ゆ

抑一条院有所流不可説物也。式部日本記を
ものがたりなれども作。于時左衛門内侍始山
論言号日本記御局云々。誠諸道諸芸皆縁
以一篇不可説未曾有下説。源氏奇ハ為也
狭衣奇ハ為ハ為ハ云人ハ云ハ云。条心深
清輝事也更非同日論議狭衣奇也ハ
愛ハ為ハ云。源氏奇ハ不可及事雲泥也。凡
奇ト道ハ知ト不知水火者也。源氏ハ第一也。詞
づかひ人ハ面白ハ不可説事也。第二奇ハ
逸是又何人及之事ハ作様也。虚云盗優

美ハ是ハ云ハ也。仮名見奇又不可説也。仮
是ハ我朝最上也。詞ハ更非人之不為物也。未知
細之様不奇哉是ハ元古今後撰為大意時
ハ則一条院ハ云ハ。行ハ非普通物歟
一河海序云。光源氏ハ寛弘一条院のもとめに出き
て。康和堀川の事ハ云ハ。略之
一同抄ハ云ハ云ハ。紫ハ為ハ云ハ
ども。西宮左大臣。安和二年太宰帥ハ左遷
をもれ給しかば。為式部ハ
てぶひのもとをもとめ給ハ。大安院選子内親王ハ上
村上女十宮

東門院へ御ぐしをやしなひたてまつる事
なを絶ぬるなり。うか行どり橋の古柏ふるれ
ども。ながらしく侍りしてなるべきう。
式アよ堀きられたれば。石山まで通船してご
のとく水ありけれども。八月十五夜の月。湖
水にうつりぬのときわうまつに。柏崎の風情をに
うつしけり。紙ものれぬさきよりあるとて。仏教のよ
けるに。般若の料紙を本尊のやうにうけて。まいを
海あり。れ五巻をとりさしでめをりぬ。をこりをして
法華の巻ごとにひい十五夜ちりをりとなげ

いそぐことはりとも。後は罪障懺悔のうへ。般
若一部六百巻をこめてうきて奉納しけるぞ
よかの寺よりとうこ。光源氏をたたえよか
ぐ。紫式アグ為ふうへて。国司且の居
易のおとうんぐ。左衛納言菅義相ノ為ノ
引てうき出しけるうぐ。そのうち源氏物語
て五十四帖よりて。なをりしを。稽古納言成
よ清書せさせられて。金院へまいらせられを
ふ。法成寺入道南白。奥書を加られて云。
物語。世話式アク作とのこゝろ。紫式丘年を

加ふるところ也とぞ。誠に名僧の交仁義の色好
色の媒菩提の縁よいくらまで。色をのぞと
いふとも。其ことわり。心さ。莊子の寓言にある
じきものの。詞の妖艶さふ法華経の一アの
中に。皆之のゆをきられてくさいでうる所。
宗式アの名をあらくあつて。紫式アと号をれ
をり。一説云。宗式アの名遊去ずとて。嫁よ
宗のをれの名ハゆりよ。紫の字よあらくあ
らうとぞ。或説云一条院のはれとこのゆを上
東門院へまいらせうとて。我ゆりれのお

つあるとも名とやはけるふゆうるとて。
名あり。武蔵野の義ありとをいへり
一物語の時代ハ。酣酣。朱雀村上。三代よ。准する歟。
相夏ハ門ハ。延喜。朱雀院ハ。天慶。冷泉院を
天暦。光源氏ハ西宮左大臣。おなじ也
一照宣公の母ハ。覚平法皇ハ。延喜の帝ハ
伯母也。後住大臣母也。桐壺ハ門の一ハ。腹とあり。
此外其説あり。紅葉。准後。若紫。准後。誠よ
ひあるといへども。此物語ハ。光源氏をもとゝす
承歌。ハ西文。左大臣よ准ずること。一世の源

民部卿の法いれ国しられども校正の好色の先
達とはさしてきらくさるべや。今の世俗は弥よ山
道をもとうる様。答曰法ろものくろれなるべし。
大縄は真人のおもうげあれども形法はをきて
もおちぶちにくくにくれと模することろ。漢
朝の書籍春秋史記ちといふ実録ともか
か有二吳国一様

一相国帝嶮泉院と延長天暦よりすゑ
ぐ〳〵或唐の玄宗のあるべきりとひき。或は秦
始皇のうれるべき例とうつりぬ。又天慶法門は相

続の騒乱おそうまさひごとぴものぐりゆは
朱雀院の法令上。嶮泉院の法様なり（或流白法条有）
（作者意趣様）光源氏と安和の左府は法もとい
へども。好色のうさいは通のちん達ちゆへよ。左中
将の風とまるびて。五條二条の后を寵重れ
女院勝作物の高侍ようへ。或はくさのくり少
将のをもりをはりへり。又太上天皇れそる暴ち。
漢家は左の旧躅本朝は李壁玉子ホ
先蹤を模ちる様。是作物語のおもせ。そ
めようづれのは時よりてなりよ書あるはさで

系図は不也。是は延喜の法皇と云ひつゝ、ひ和或は桓武。一条院を相兼は門よ
準じ。又四方院伊周公を。光源氏よ擬するも
以一義も為ぬ。謬説也。義桓武といへで。
其後の帝王。陽成宇多延喜の法名物語
まあり一条院ちゝ。延喜の法名後代の中
乃ゝ。其上法名巻ゝ。ほとんどまもり。千
枝つゝのつもるも。女人。朱雀村上の法世の妻
せ。ぱ法と云ふ。一条院まで。なぶ生ず。又後冷
の巻よ朱雀院を南代の由載ゝ。是吳編耳

一此物語此本一やうちゝ。ぶ。行成卿自筆
の本と。悉今世よ伝ゝ。源光行八本と
校合取捨ゝて。新本とす。一説謂二条沸仲
房本。冷泉中納言隆本。堀川左大臣後
房本。号黄表紙。大臣号。後一位藤孝本。法
性寺南白本。唐紙小双子。号高倉侍従。五条二位後成本。京極
中納言定家本。号青表紙。等也。各雖此本。皆有
異同。彼合古本。且可加見者耶。善者
後之古今之義云也
一黄表紙。後成。青表紙。定家二条家用之

奥入計あてらるゝ也。已達耳為也云々。為相
母阿佛為氏継母也。奥入を切て流らるる也。或
説奥入八行行作也。それは定家卿経を加給
ふ也。

一河内本。河内守大監物源光行八本をもて
校合取捨して家の本とする也

一紫式部 母常陸介藤原為信女 東門院女房或宮司女房
内舎人 勧修寺家祖 利基 兼輔 惟正 為時 紫式部
良門 勧修寺内大臣 高藤 兼茂 女子
冬嗣公大男 院中納言

はゝ式部八後よ左衛門督宣孝の嫁にて。
三位弁房 挟衣作者也。
極西頻今。東北院向也。院八。東門院ハ古之法
也。又式部墓 石塔 雲林院 白毫院南。小野皇
墓の西なり
て。盛者必衰のことを聞て可見。悪ことハ好色の
くるにくるべくもあらず。源氏をも能あ
ひて可見。
一九条十四帖の巻名。四の意あり。四ハ何とも
ア。二ハ弁とも。三ハ何と弁とも。三ハ何と弁とも。

四諦等を初とする教を名とす。天台の教は四諦法門なり。四は空門。二は空門。三は亦有亦空門。四は非有空門也。一切の法教は。此四諦より出ずる。これよりて。故四諦外別に法性とも尺す。真實の通理。云教の所に

あるべきなり

二一巻調壷　初を名とする

桐壷は。淑景舎也。此壷曹司にうつりて。

光源氏の母御息所と。桐壷更衣とて。仍巻名とする。名壷前栽。初はたまへの作ぶ

ひんざいの盛なるとあり

二の奏筝ボ　うつくしと名とする

もてさの式にて。巻のなかはやちくはぶひの名

并一宝蝉　紙のちらしやも。巻と名とする

空蝉のこと式にて。此巻に紙人てげこと出

巻の并れとは。ちらの地法中三の并。春日

条又中ふ。吹上巻に并。祭使菊宴ちどあり。巻表

のことにてなり。并一はあり。此の例欠

凡并の様一偏に同時のくくをみず。横

紙をもて同時なることを是と修

弁こと云。空蟬の巻をもちゐて源氏物語

也 末摘花 ハ縦横おなじ事なり

弁二夕顔 縦のもじひせ。弄と書名をもちゐ

給へる所にて白露の光そへてゆふかの名

三 ワカムラサキ 紫上 弁をもちゐて若紫とつづきて河

ハみゆ

ふつゝかなる所にて源氏物語の名をさ

弁 末摘花 横縦のもじひせ弁をもちゐ

ちらしてさくらの花ちるとあるを

四 モミヂノガ 紅葉賀 河をもちゐて

仏の巻に紅葉かゝとあるをもつぎて河

花のえんの巻に花紅葉とあるを。為 裏葉

の巻にもちゐる

五 花宴 何をもちゐる

南殿のさくらの花えんをさそひとある

六 葵 うゝをもちゐる

ちはやゝのもぶせるあゆひ人の三日月

七 榊 弁をもちゐる

神がきは白の榊をもちゐふまづ

八 花散里 うゝをもちゐる

[illegible]

九次（スヽ）ノ 哥ニ詞トハ云ヒトリ

松ノ葉ノ[illegible]ノ苔ヤ[illegible]

十明石（アカシ） 哥ニ[illegible]

[illegible]

十一澪標（ミヲツクシ） [illegible]トハ云ヒトリ

[illegible]

并一遠生（ヨモギウ） 横ノ[illegible]ビ哥ニ詞トハ云ヒトリ

[illegible]

并二関屋（ヒヤ） 後ノ[illegible]ヒヤ 詞トハ云ヒトリ

関屋[illegible]

十二絵合（エアハセ） 詞トハ云ヒトリ

[illegible]

親王絵合の[illegible]

十三玉鬘 哥ニ詞トハ云ヒトリ

[illegible]

十四蓬生（ヨモギウ） 哥ニ詞トハ云ヒトリ

[illegible]

十五 槿（アサガホ） 奇と訓とかなとをり

うゝ[illegible]

十六 し女（ハシメ） 奇と訓とかなとをり

し女子も祈さびわし天は地つる花世[illegible]ひへぬれば

十七 玉鬘（カツラ） 奇とかなとをり

[illegible]

并一 初音（ハツネ） 縦のちゝびせ 奇と訓とかなとをり

年はとゝ松さひられて[illegible]

并二 胡蝶（コテフノ） 縦のちゝびせ 奇と訓とかなとをり

花ぞのゝこてふ[illegible]

并三 螢（ホタル） 縦のちゝびせ 奇と訓とかなとをり

声はとゝ[illegible]

并四 常夏（トコナツ） 縦のちゝびせ 奇と訓とかなとをり

[illegible]

并五 篝火（カガリビ） 縦のちゝびせ 奇と訓とかなとをり

篝火はたちそふ[illegible]

并六 野分（ノワキ） 縦のちゝびせ 訓とかなとをり

野分[illegible]

并七 行幸（ユキ） 縦のちゝびせ 奇とかなとをり

[illegible]

并八蘭（フヂバカマ） 巻のならびも哥と詞とに名とせり

おなじのゝ露にやつるゝ蘭あはれはかけよかごとばかりも

并九槙柱（マキハシラ） 巻のならびも哥をもとゝせり 或梅

べとも云り

十八梅枝（ムメガエ） 詞を名とせり

今はとてやどかれぬともなれきつるまきのはしらはわれをわするな

弁（ベン）少将拍子（ヒヤウシ）とりて梅がえをうたひしとなり

十九藤裏葉（フヂノウラバ） 詞を名とせり

藤のうらばのとうちずんじ給へるとあるを

二十若菜（ワカナ） 上下哥と詞とに名とせり 或ハ上下巻

ともいへりとせり

小松原末のよはひにひかれてや野への若菜もとしをつむべき

廿一柏木（カシハギ） 哥と詞とを名とせり

柏木に葉もりの神はまさずとも人ならすべき宿の梢か

廿二横笛（ヨコブエ） 哥を名とせり

よこ笛のしらべはことにかはらぬをむなしくなりしねこそつきせね

并鈴虫（スヾムシ） 巻のならびも哥と詞とを名とせり

大かたの秋をばうしとしりにしをふりすてがたき鈴虫の声

廿三夕霧 哥を名とせり

山里のあはれをそふる夕霧にたちいでんそらもなき心ちして

廿四 法師 寿と名ことり

あまめぐきはたちぐ〜えたのまろ〜世てぬしまち体れ隠ハ

廿五 幻雲 寿と名ことり

大宗とちろ幻夏やぐらみうれ玉れ和ちて〜をよ

廿六 雲隠

此巻に名のみありて本文なし 白氏の巻ハ

あとうれ給し 後このもとうよめて去るべき秋雲うてれハ

遊去ることいつくとも也 万葉集 亀山天皇 文永年間

玉鬘 男女 後作寿

五三 大皇

右皇ことうこみおほあ〜ぬ対ふハあ〜ねごをぐうれまて

此外 不可 寄 勝汁 宮 御木の巻 六条院世とそ

ひさ給て 三年ぐりさぐ院 隠居 隠居 隠居し給

ふ由 ふてうれば此巻ハ中に三年 隠居 隠居し給

てそのち出家 出家 ふとなれば巻 河あ〜ぬ

べき也 作巻の名ぐうて 河とうあとえ天

台の四教八門と例に引れどもなほ也

んちうぬ花名ふ〜ぬ〜ちうし給也

此巻ハ八九年のことうぬ

廿七 匂宮 匂を名ことり 或自筆ハ名 名

薫 薫中将 作 御の世人 自筆ハ中ハ

ときてゆるいとつぎをとあり

廿一紀梅 紀のうめ 紀ノ梅 紀ノ梅 紀ノ梅 紀ノ梅

ろくとあり

廿二竹河 竹の名也 竹ノ名也 竹ノ名也 竹ノ名也

竹川の底うち底二つとあり紀のそこ八ちりや

廿八橘姫 字名 奇也 奇也 奇也 奇也

とあるとき

廿九椎本 奇也 奇也 奇也 奇也

椎本 椎本 椎本 椎本

三十角総 うとことばをあとき

あげまき紀ようちぎきをうとことばあるのかたちもあくちん

吹一早蕨 うとことばとあるとき

紀ようちぎきをうとことばあるのかたちもあくちん

吹二寄生 奇也 奇也 奇也 奇也

吹三東屋 奇也 奇也 奇也 奇也

吹四浮舟 奇也 奇也 奇也 奇也

なほ花ぢる小船ハ多色かり迄とこそゆき舟でも乗ちるなり
第五蜻蛉（カゲロウ）
あまねくてらすとてかぎられし文ゆく色もちすさき
うきことなど名とそり　えし蜻蛉
第六手習（テナラヒ）
ことばと名こそあり
てならひとつかとは四ケ所あり
第七夢浮橋（ユメノウキハシ）
花鳥のまどひ巻の名は夢をも泪にまかせく
ざるとなりア名目は四句に料簡（レウケン）してなり
でに釈しをかゆるなりしハ古哥の泪によせ
中の夢のわたりのうき橋をとかくあやうくとぞ

て後のうきちーと汲ぐむかひぞの子綱河
海柳にさりて指遠（サウト）きておぼえ侍りしに智
の巻は終（つかり）のことばなどいふちらんゆめのあて
ありもおそれをもくちんこふやあやうし
そんどうき舟はとそのうのさのかとくに
きもへうきく

源氏爪印巻第一

一いづれの御時にか　此発端(ホツタン)の辞(ジ)甚深也。先此巻を
紫式部はじめて書かんとせし時、巻々の始をもとめ
遊(スサミ)あそび侍べの詞をおほさんなる也。延喜の御門
乃御時の事也。伊勢集の始めもいづれの御時にか
ありけん此詞をとれり

一女御　后也
一更衣　ましてかうい（更衣）ハかるき人也
て桐壺の更衣は母うへをもちたる也。よしあるハ
縁ある也
一いと　早(イツカ)幼也

しハ助語
心
一いさめ　諫(イサメ)也　標示制(セイ)乃
一はづかしく　つきなき也
一いとどしく　ほめたる詞也。
一いとよくの心也
又甚(イト)也。なにとなくあはれなるべし
一いへ　本意也　いたう
一かゝやくばかりのうつくしさ
ば。花の色にもまさるといふ心也
一いぶせき　いぶかしき心也。いぶせきハいぶせしといふも同
一いはけなき　幼稚(ヨウチ)也
一いさゝか　聊(イサカ)也
一いつくしく　清(キヨク)也　八助語(ニヨコ)也　雲(クモ)の上人とは
男女共に上臈(ジヤウラフ)殿上(テンジヤウ)の人をいふ也

一ものしこそ　[illegible]　今様也

一いもせにゆきにうまるを　奥之奇　未聞

俳諸集

一おてそそまろ　奉侍也　一ゐるそちおりいとちき

居立也　そちゐて　池之祈也

一いそそ　倚子也　一ゐたちき　いとけるに

とは　僻　変也　いときたとゐべ　為勢　説

ゆもとゆひとは　か冠　人のようにて也　変

ゐんとそ　変　脇の　女を　源氏　はそひづま

ゐんも　一ゐきはひ　勝也

一ふ六日　いろうむいうどうもべし

一ひとゐ　飲　酔

一ゐひなゐれゐ　世に　池底也

人ども　世上　ひろゐるひも

一ゐての紙ゐる文　昔八幡氏の　[illegible]を

ども

一ひはそれゐもとう　一ひゐる　優ゐる也

識の也　三界　唯一心　一百法唯

言殺　ひろゐをはどくゐんも　一ひそ　流そそ也

一ひそ　まひひゐる　猿也　引そゐるど

いろること

一へちとおもとりんうこ

馬仗ゴ和ゴ女を遠ざけて換ぺ給ふる妻帯と

一ゆきかくる物の声 管絃もむしろうをはきくべ

くるはゆづくしうしず今換ゆめづくきもハいで

くるも

一ゆきや 子ちもも

一ゆのゆ 伊与守を妻とゆくる夏長官も決

官を職掌ハおちるづさ有也。諸國寺願の時

ハ妻長官の夏と執行也。ゆよりて寺を

ゆとも云へり

一ゆとと 系量ゆ有

ゆてとあれ。女をべ男の未ゆくく法也。古今の帝

よりこのことゆ。天照法師とのことゆ

一ゆきくちるるもけるし人のねぐゆとも有也

一ゆぐ俗よどるもやと云ん

一ゆむ 忌也きくふるゆ一ゆでゆくびかまゆにゆり

うをこのまゆ妻べし一ゆのゆげくも 伊与妻

俗よある時ちり。面白書ゆ有ゆり

一ゆとゆくゆとまゆ有也一ゆむとゆ有 受戒

ちくる也

一ゆきうふねやきくゆ也十六夜をゆきうひと

云ゆ。夕の山乃端よやきくひて出る有也。ゆ入

ぐさをやまとふみや　一ゆかりのいろいろ
あるまぐさのこの涙（ラウチ）ちるや
一ゆかりとれう　いそぬのうとものうれとやいねうるや
一いさあれ　一ゆへとと　諺　本草ニ云
頸短（クビミジカ）　灰色（ハイイロ）あり　一ゆうとれ　一ゆうとれ
一ゆかさ　大乙（オヽギヒ）　昔ハ女をあてざとぶこうさ
ちどいり　一ゆあろ十日　去弘十四日
一ゆそけちれとづの一声ハ　ゆ美ろとさとうと。
あまにちづむハ源氏の我身をさてのく
まゆうり。泥（ナヅム）えちゆめ　ゆぐちゆめ

一いさうはちそかれ軒（ノキ）一ゆどうれまうさおうそかんと
一いちびいやといろや一いのちちうれハ老ル日。
聽（サヽレ）　一いさとれ　聽（サヽレ）　稀（マレ）ゆ
聽（サヽレ）　稀（マレ）多（オホ）し　辰（ヒル）
一いまやういろのえゆうすまうう花今都（アヤ）　今やう
ゑとれ紅梅のこさ花ゑゆ　ゆとへがこさ紅ちあう
ず。又紅ちとあうず又紅梅ちとあうぬ。
ばうあてばは出ちあうちうれば今極（ゴク）とい
へり。大略（リヤク）ゆうゆとゆうすまう
とは紅のこれうこれうちうれで。禁（キン）ゆ似ち
うこれうてゑや　一いりをいとうるてやう

と綴るも　伊牌諸。伊牌冊。冊の字。先賢初て文字
婦とぬ給しまうつそて文字をいとをといふも
一いへのこと　良家子也　種性ある人なべし。拾遺
ハトよ三腸の家也　一うるく　有職也又右
族也　一院　寛平法皇。
もとのべし　一うきあ　はせたる紙
そんさう令婦がかへしも同
一いとさ通ちうとも　後の世なりとをいふ
一寄元のえん　一いづれそと　小ざぐる系子用とそふけとは参
ひやどうとをめしたるべきいそれること

一いづれいつさうづくと二条おほうち一条を同
へ物語也　一うきすぐ後　生霊也又
こで夫のことも　一いちそやき　早出す
そやるるんも　一おんやうぶ　掩陽古詩
の字をとうぶで。陰陽の字を。何文字と推
して勝負もるも　一院のはそうおうこと　何所
とも乃こず。栄花物語。岩倉と云所に潮
の夏ゑ松濤乃ぬく狩　天暦陵をのうもて参也
一寄元　春のこやこ紙。東文法もるるり
一いろくのこてぐ　青幣　白幣　日本記又

五色幣あると　一家をえらべる　離家
三月落涙百千行　一いつのゆゑ　水濁也
一石山　聖武天皇ゆかり　金就鳥仙人建立云々
一いろくゆあるものつきゝく　ゆゑ拾ものとゞめ
狩襲　ハめひ拾ものとゝ　深をとゝする也
一いまゝめて　くくくにくさめるゞする也
一奇特　一くうゝり　張騫　漢武帝使として　槎　木筏
天漢の源を　究て　孟津　いたりて　牛
女を　通て　神　とゝ　ひのくよりゝ
一奇　一ゝゝゝねハ　小井　日本記ゝとゝれあるゞハ尾張也

さゝてのゝゝ也　一一世の源氏　源氏を初て
ゝゝと。一世の源氏と云也。一世源氏任官已後。即位
例　光仁天皇。元大納言以外多略之
一いまゝひとりハの名さゝ　一つ　為つゞのとゝゝや　一流
杖好ゝんとゝの名也　一ゝさりをゝ　一ゝさりと海
ゝて奥をとれ支也　我力のうさゝとゝ　ゝひさゝ
ゝゝ也　槎　舟のゝゞゝと　海ちのゝさり　ゞゞまゞゞも
一ゝびゝさ　鼻　一家ゝゝゝゝ　一ゝゝゝゝと　孔系ゝゝ
借衣也
うゝされゝゝと　ゝゝ代を　孔ゝゝ

一手ぐうる　下向也
出先照高山心也
おと云
猥人　猥〻如蓼春葛註　濃和也
一ゑのまめたるすそごけれ其下　未濃とは也
はくびゝよハ白くすそを出或ハ緋よ深くる也
一いるゝづゝよんゝごさ　古今序に絵よりける歌
一いたりわるれるゝんや　まるを仰ゝるゝんと云歌
一いひもてゆきハひとりもよ般若波羅の心歌
一合ゐて碎空碎破の空理よりづゝ方角よ

しゝてゝ空清孔を〻を今異竟ゝる空と似て。
技まの様をゆるゝゝゝゝてゝを空一念のたゝゝゝ
無ゝゝ是といひりてのをいひとりもよとゝゝる
気。又般若ゝゝゝゝゝぶ。一カ法　如のゝゝとゝゝ
一ゝゝゝ　題
一家のゝとゝゝて　尚侍
ゝハゝゝゝてゝ空ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
空ゝゝゝゝゝ
一いとゝ山　緒新橋。奥列也。文ゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝんや　一ゝゝゝゝん　三位ゝゝ出
ゝ文を用ゝゝゝゝ加陽のゝゝゝゝゝゝ

一やくもく　敬心もり　一花のうつくしきめーうれうるそ
らいうこさんりれと云んも　一家しうこのそむ　女三の
家司を定めを云つを帝王女選二簾人事也
一いきまれこと奏　自二十三年奏　悪人奏めはいぐーいるる也
一ゆめーのうつり　源氏天皇世治行さうに慈仁
云をそーひてれとあつまを行ゆと云つをそれな
女三を准もう義也　一のちうて　今ハうもと
を世のうれ契りちうねべ契りハうもまーとも
一つるれば　當を源氏こ行ひて　猫ゆて女
當ハ花の移ぬ物也　一つうこ人

三をひ出ていうり　猫をさして云也
一ゆうう　名ありくうもも　一ゆまはとて　をひいるる
名ありゆをのうんを也　一ゆうれとううさうる
とまりうる高れとゆ　一ゆうれも　横
義をのをとも　一ゆりとは　女三のゆ
て今ハくうさまーうさ　義れ世をゆをひさ寺
ゆをあーびとの花ひ　をひて々高れくうる
つるゆめ花の義を世の変ちるべ
一ゆうのうー　花うき　一ゆうんも
一池の蓮　時移変化云。樂尽悲来。毎至二春之日

冬之夜池蓮夏開。宮槐秋落　長恨歌伝

一白玉のるふぐ　女人身にて五障に者。不得

一梵天王二者帝釈三者魔王四者転輪聖王。

五者佛身

一竹門まちらうやおりすんも

一いそゆりいふるり所謂

一ふるひとりへも　還城未陵王をあやふんとす。

日の雲なる撥てりをを返すとそつと。

史記云魯陽戈迴落日

一いらくさを祈也。名るそぐ之心

一ふるりる浅茅　あさちのをれりりをそて船をの

船をやるとも

一ふるりまんの寄よ嘉へぐそをとをたいあさ

ほそ。ぐあるる船をの家をとより

一ものの　どとはの字也

一ふりそやと　いそぐやもれどその字清てるむべし

本れなるとをるる世せあり

一ものの森のこをあいり　人げそとあるを。

人ぐそるそと云ふそ引人てををり。芝の中を

一秋逢ひとは結ぶと也

一ぐるまの銷目不如蓋

一 ちくぜん 昔もそもあひつれとも。無実支也。大義
もぬけのから也
一 ひとこゝろのこゝろ 崇神天皇 挑戦乃事也
一 あすか 一つのけさば 今の古澤川也。
一 ちゝ 鯉八也 とうこうの事也。やまく
ねをもぐ。ゆみとる化をとうぐ。ぎょんりとも
さゝゝに ゝりゝゝゝとある也
一 ゝゝゝゝ 伊賀力女也 中嶋也 こうこは狐也
ゝゝゝり
一 ゝゝゝゝ 白雲のゝゝゝ 一つゝゝゝ 秋ざとゝゝゝゝ
一 家ゝゝゝゝ 鰐 穢 ゝゝゝ

一 ゝゝゝゝゝ 真実の穢 ゝゝゝ
使ゝゝゝゝ
世俗ゝ云河也。ゝゝゝゝ 一つゝゝゝ ゝゝゝゝ。
一 ゝゝゝの扇 ゝ重。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝの扇也
ゝ
一 ゝゝゝの物 禄物也 一ゝくのゝゝゝゝ 禄辛櫃
一 六条わたり 佐良の支。始て出をりゝ義
のゝゝゝゝ 状乃中ゝゝの法也
一 六十巻ゝゝゝ 玄義 十巻 釋義 十巻 文句

十巻 疏記十巻 摩訶止観 十巻 弘決 十巻

一六位の中ゆと云人ハ遠塵の
袍を着もるを青々とのみ。今を極喜乃為人文
着もるも　一六位すくを　六位冠者
とゝ。すくを人史海の姿をゝり
一六条院ゝ　河原院を模もるも
一ゝもゝ　無論也　一六条院ゝと花名妻
離云別業也　陽成院ゝ　陽成院の法後。字多の法門繁
字治院と号を。陽成院法門を指し給ふ事あり。後六
しゝ。米雀院ゝ

条院ゝ雅信云の邸ゝ。長徳法住寺殿
白。買得し給ふ事あり。此物語ハ六条院ゝと
ゝもゝ　一六条院ゝ　白云ハ
ゝゝと曹子あり二条院を里也。又六条院乃内
ゝと曹子ゝ云ゝ一六十位のゝを　大般若
轉讀のゝあるゝ。七位と六十位の中ゝよあるべし
一ゝもゝ　唄唱ゝ　ゝゝゝゝあり
は
一はゝゝ　無常ゝ　ゝゝゝゝ
ゝゝて後ゝ
一はゝゝ　聲華

一場すると玄宮坊 職員令御門よりをを行べ
きなるを玄ぐをもの也 一はしらめもちゐる
けるさとちゐもんの鬼鬼日本記
一はうまうぢの変 皇子三歳ゐて袴着の例吟泉
院天暦四年七月廿三日東宮の御袴多し女
人のを同 一はうちき 袴 袴裏
ゆうひちきんるるべし一はくさしき 袴寒 肌と
ゆりてうむ流をを 鬼の寒せ
一はうぐきうういく 袴一はぐまあれ門と更衣と
のとをゆうぢむハ養育のんて

一はうひをるべ校をうさん 天顔作連理枝 長恨歌
在地願作連理枝
一はゐん 陪膳也 四位をゐんのすう侍とつかう
一はをゐてぐに はぐまの汐聊しつ。母ぢの
ありまを時ハ皆人のをねをのをてぐ
ゆうをを結べきゆ今ハゆうを結るゆあしとをんゐ
べし
一はうを 博士
一はうまりうゆ 親王以下元服の拜舞 袴涼
母の東の座ゆてハ弟へ向て拜あり
一はうつをぐさ 草葉の下のをとをゆり

一はづくも　八首
といへり若のことなり
一はんしきてう　盤渉調ハ人の調子なれバわるよ
あひそうおうべし
へるゝ色紙定て張ぬ披
一はやりめ本のめ　見なれバわかる也
一はやく　腹くハくさくとつけり
一はぢみせん　半部　常のことながらはだかのまくらもとも
へあつくちるさわろつもやうにあるる也　花鳥かて下ハ
からしちく枝ちるどをうらくよ下に志やとをつりてが
一はやうもとのとはちやう
一はげと　剛念怒ん也
一はうそく　ちう　僧側おる
へおろすやうにさつるをとつて東のもとそでさもとて
みたへの者とこけりあがるとぞ　半部と名づけるも
一はやかう　兄弟や同腹一母でそゆへおろべかれ松風
の奏まよ太井の藍兼明親王と名残ハ堀川女よ進ぎ
どてんべし　一はつまよ成る系　楊よ出
一はらちがき　放書文字のひそひくなるちかち也ぞ
そそりちことよめハ文くよめつぽ明せ
まぐくらさ清くきぬをさゑ也
一はげしてん　気あがりそハとあり氣をこなそくさの
ゐ也
一はぐろめもし　花鳥
山海　絵

東海ニ有黒齒国其俗婦人歯悉黒染今案
日本ハ東海ノ中ノ国也 按俗ヨルヲ染ルヤ 昔ヨリ
ときなる花ハ 花ハ たゝなるくらゐを付ざれば花の
ものゝ つゝみて 其の姫 年十歳ヨリ 丈まるま
で 黒 點 をしるすこと
一はくし 仁和 井 の 部 寿 次 幸 八 象 院 ニ 為
所 寄 ニ 佐 興 之 役 初 造 階 屋 ニ 見 東 ア 王 記 集
慶六年也 今案南階の ハ を ニ ス ル よ を
きいぐ 付 を て ぐ ち と 云 風 輦 を ひ ん ぐ ひ き に
うきまへて たのゝ ハ ち る と 案 ハ 下 ハ ん ち も
一花のうつりかはるを 花 ハ の ま れ 云 花 の と
つゝみ花 ハ ぶ の ま う ま ハ ち と ま ぶ さ く う の ち ぐ
めるらんし 花 宴 の
詩 ハ 春 と い ふ 侍 の 家 の ハ ぬ ひ ま あ ひ る 支 也 深 民
の 栄 花 の 去 を ま ち ま ち を そ ひ る ち り
一はるおろかなり ものくまる時 ち ち 人 用 ら く む ち
まて 必 ち ち の と ハ ち ら ぐ と こ ゆ ち り
一去の 曾 さ え 波 ら 春 宮 る 特 弄 花 一 名 天
長 宝 寿 ま と 云
調 度 の 中 よ 海 松 を

盤山蒼山樵海松青岡の石二つ是也是を
[illegible]
いつよりをくり八月八有の天人
こハぞふのまつりをくりるど後行ごとに
つまされどうひるーまを一まやこさあるもちんに
らんぞうれどるんひ後ぞ不叶
後のんとの後也只まをぞめ分くまいくを
んのんぞくり也
孝徳天皇大化四年
八有ごろ八月八有ごこもとへ八有の本院ちるれ

也朱雀門の内一町ありぞ南限冷泉院北限
中院門ぞ東ハ東ノ坊城西の坊城を限也生車
八八有の夜ぞ立つぞもくるべしいぞ車八人
後の立也
一白虹日をつらぬくりを
をぞくり 漢書曰昔荊軻墓燕丹之儀
白虹貫日太子畏之 燕の太子丹ぞ始皇を
をくくりんをくりぞ今源氏をくくへくる也
後本ぞ日ぞくくあくるをを風ぞくぞ日ぞ法ぞ
あ義也白虹日をつくくぬけぞくぞ法ぞ日をくく
ぞくくんぞくーくぞ後ぞくくくくくくる

也。今源氏を剃髪したてまつり冷泉院を太子
冊立したてまつり一条の院をさやう
春秋御讀経向玄源氏のをこたひ給也。定
家卿のや是ハ源氏のをこたひ給を一動
禁中ものよハ定也　一はつのもとはさくび
雍花頭竹葉経春熟階底蓮面薇入夏用
一はつ居ハ居のつゝみ　はつ居のつゝみは是を云
人のさゝびひもりとこと　一はるさのつゝ紙　鈔を
けつむも縹唐紙　一はしら物　物ものこれ
也ひやうしをさゝるもの

一はつちつゝさ　義眼ちつゝ也紫晴の蜂炉
梯ハ也是ハ沈て云陵　一毎つゝ　朱雀院
ハ延喜中十一村上天皇ハ第十四皇子也代皇
内中多温子　昭宣公の女也兼明親王の
女更衣腹故人臣也代皇
一はつちつゝ　弄愚親の賢のまさゝめ也
光愚子　一はるまのつゝさ　鳥の
動ものやめくも月の動をめまぐるさといふこと
一はつくめ　歯固　元三の月支也。歯ハ年をひも
則よこひこゝよりの歯固ハよろひをくゝ也。

高つき高坏は杉葉とも也。餅大根湯
とも也。餅は近江の国の名産にて餅を用也。
則其國の鏡山乃奇を泳ぎて
一はつねなりとめぐさ　ねさしたる人の初て文書奇を
よむを云つる
一花よりもれつゝ　俗よりは紙
ねつとゝ云也　一方等経の中に　方等
経の中に四教をもつゝ人て多くよ流のゝり是法華名
経ゝ也。時昔のさとつ人をつゝ今はさとるとも
とゝぶ。化の名生。亡物とゝくり。會の名生
ゝ空猶乱して。加葉法てゝゝゝゝゝ男へ

法華経ゝ云ゝ也
一は孫とゝくゝ也。朝ゝ使ゝ。羽翼已成と以へ
一はゝちゝで　放出とゝ花ゝ不詮寝殿
とゝて。母屋ゝ内ゝ名ゝゝて。中を隔て。
外板ゝ人とゝひゝて不ゝ也。帳障子
ゝゝゝゝゝゝ也
一八条式部の法方　仁明天皇ゝ。本康親王を。
ゝゝ上の父ゝゝ也　花ゝ妻
一花のゝは　ゝとゝ　校とは。早下のゝ也うゝん
油ハ。ゝゝゝゝ焼物ゝゝゝゝゝゝゝゝ

じども

すきくら綾也。三月の末なれば。玄の末なれば。ぬさは張りの人形綾

一はつかりなり　弄ウラ下　祝ヲリコ　祝ヲリコ

受ちいちまつりとなりいふなるべし

一玄祝の引幸　紀覲キノ　幸を云

一玄のことしは玄月綱子ハ大夏なれば。さぐと

引つくふ。さぐ。源氏のいと物しく笑也

一はつかりなれ　腰ヲギヲナ　一花の色をとりのへて　蓮

花也

一玄のさしのぬさ綾

一はつかりなり　弄ウラ下　祝ヲリコ　祝ヲリコ

受ちいちまつりとなりいふなるべし

一玄祝の引幸　紀覲キノ　幸を云

一玄のことしは玄月綱子ハ大夏なれば。さぐと

引つくふ。さぐ。源氏のいと物しく笑也

一はつかりなれ　腰ヲギヲナ　一花の色をとりのへて　蓮

花也

一ちすの葉を　蓮ライセ　葉也

蓮基と　蓮ハスノ　基ヲナ　と　葉ハ　花ハ　ちすの別名なり

ちすと也。女三の法事より身をなして法をとり

ひ。又會　會サン　讃ヲ也　弄花　一羽幻　羽衣の　羽衣ハ　衣ハ　縁ニ

一花の香よ　弄紅梅　花の香ハ　花の香ふかくそなる分ていなるき

と早下のこと也。月のあるうちをもぐさまつるべき

一はつかり　弄紅梅　なり　花ハ　家ニ

ことなれどもこのこと也

して。女ぐ。人も。女三の月。ぐ。源氏。宮ぐ。

一橘姫　橘下ハ　姫ハ　大内裏

一花ちすの本　花ちすの　陽陽ヤウヤウ　陽陽ちすと也

孔雀法

とも也

一はくもく　大方也　寺のあるを一流みそぎの逆車
あれば陰陽博士ちるべし　一はくもくや中の除
脚をよる力のふんも　一花ちるたくさ
ひぐのくさ　こがの花をちるもの
一花のちるに　不是花中偏惜菊　山花開後更無花　元稹
一は山のまぎり　大きのも
くりをあんとこひもへどもとも也
一毋ちるや　浮舟の母は早下ちる人也　故訓の
時は早下ちる母ちる如　文をちる也
一はんさい　犀角のまぐ〳〵ちるる所ちる　班

犀　常用字解　中位又位の人常に用ゐる。高服者為犀
常　孫開中月班犀をさすやちるもの常也
一花ちへも　女郎花の名あるちりともちへての
家のちるひちるもの也　実ちるちり
一はちのく　蓮子　数盃と詩よも作り盃の名
也　蓮子の心ちる青磁盃也
一葉のうすきちる　陵園妾云。紅文如花令
如葉落　白氏文集　詩ハ若忍のうすきと云云。
今拙作の心命は妾のうすきと云云。

に

一にけちらす　無量寺也　みけちらすなり
也。ものあらず　仏ぬ也。ものあらず　仏ぬ也
一二のまち　次郎町　こんぜ也　一にさはく　富美
ゆを　ゆ也　饒贍　一にうふ　ゆうより　俗
人ゆ也　一にうきさひとりの
じのとうり　一にてあらずゆうき
変ゆ　ゆうの　西村也　一にあく　無二寺　とゆ
ゆうの　西村也
一にびく　祖母の脈　也　三ヶ月の脈也　純也
やうりとゆうのうの　ゆ也

一にゆめうはたてうびくの黒ゆすくちゆき也
一仁王會　七郎助　成乃文あり　ゆうあるゆうとき
とこちゆ也　一にうきゆうゆ。ゆ
海ゆうより　一にびくのうす　脈者の
はゆ　蒙のうりゆうゆびくの布を用。黒儿性とは。
本ゆのゆ　ゆうあるゆうあらそんゆ。惟
是ゆびうちり　一にうぐく　入ゆ也
一にはちゆ　入ゆ　名ハ拙ゆ。げをちゆうゆ也。
若ゆとあやをとけをちゆうゆ也。花教と。源
氏とうゆ　ゆまゆとゆうあれゆ。ゆくまハ若ゆ也

也まどひどとゐまおゐぢやまぢやと 一日本記 卅巻 始二神代一
至二持統天皇御宇一ニ 一西山なるなる 仁和寺と
ゐふ也。光孝天皇の建給ふよして仁和年中に建
られたるにより仁和寺と号せり。又兼平ハ門
ハ天暦六年三月に出家して四月よ仁和寺に
遷化ありしが此物語の朱雀院ハ兼平ハ門に准じ
てかれこれをとり合書れ也
一 にしのそら十方 経ニ西方過二十万億土一有二世界一
名為二極楽一ト 阿弥陀経 一 そちのほひもなくかきう
へかさねていさなすよ句ひもすとゐ也。ものうき

ねどハ岩の下紅葉のこゑもえび染の袖ハ身よ一人
の下紅葉の袖なり 一 いゆかしからぬ住居に
はさぬの声とは長[illegible]の緒よつきそてよあらぬ住
身也。節も然さしてそのおふところなり
一 にゞき 絶[illegible]ん 一 におゐべきこ[illegible]
き 桂仙容 容顔 似男潘安仁之外甥 気
調如二崔季珪之小妹一 気調のりさぎし
ハ兄のごとしと云詞にて見へたり。句ハ以文を
云り。女一文より似たる白文の見にていろひ種を
こよのへとゐ也 弄一形文ハ女二文にに[illegible]也とす

[illegible]

ほ

一ほうせ　本也

一ほうらいの山　是ほうせ

一ほうけづき　仏法也

一ほうゆめ　夫新也

地獄餓鬼畜生也　一ほうけづき　仏法也

一ほうゆめて　まくしもとくぬ也　方曲也

一ほうこう　奇也

一ほのうに　ほのうに　炎

ほうこうの事　今少時ゆ妻ちれも。

ほうこうの事　今少時ゆ妻ちれも。

一ほのめす　中有　生ほうは。

[illegible]

一仏のほうべ　仏法入ても　経冥入於冥　冥永不

一仏ほとの仏ほとて上の

闇仏名　法花経

河よほとけの法ほうべ　一仏ほとの仏ほとて上の

ほとけのほうほとの仏ほとの　仏ほとの仏ほとて上の

一法花三昧　ほうべ　ほうれ声山ほうよ

ほうさて。　此経ほ四種ゆ　三昧ほうべ　ゆ常行常

座。　半行半座。　非行非座。　四種也。　法花懺法

八中行半座の三昧也。　懺法も。　天台大師　或説

等式法ほうほて六時ほ六根の罪を　懺悔する

法文也六条有房と云髑髏法の曲る山風のあり
ず滝のみくひずとなり口伝のこと也ひとえて
書くり昔八くく女房ぐふ者ぶ伝りけり今八名
目とぐに写くり伝ともちろ死るやとろく
一ほんのもと行本よも也一ほそろくもり　保曽呂
俱世利乎の名也
一ほとく　弥と云也
一ほそく　廊也　菱
南無法衆ゞ時普賢大士
法衆衆生普賢ゞ同體と云義也
一ほうろうしびはほろろん

一ほけくれてちれくろん也一ほくりくり江　仁徳天皇伝時。
始て始れけり河也　一ほんさめくぐく弄世と
改れ衆と結ゞ法しいひまりと　寛筆
供奉の起れ。何衆也ゆて也出あるも。ゆこさ面の
始あるくひとも也　一ほくれ里よはまくくりぬ
ゆや花ぬ面のあぐひくく面白く新ちくも
ゆも也
一ほくろうすきくくよ
花くりはのものぐりよくと賞とつむ衆とる。ゆ
内方ゆ。すき宿あどくり。只ひくくちるどのるれ
くすきあるとりつくくる也

一郭公ちどせ四月陰雲外語三三更後雨声

一仏のいとうかりさんゆめて　凡必尽生世の本さ

凡聖一如若熱不二の理と流て衆生のまこひ

と遠よ斷さんと学しめて大悲ゆうもつさ

仏也。なよ法を実報花王として。花叢経流行

ぷつゆを法摂さ流りさやうらくるどとさ

ぷて。元はこをもへり。仏と報身の姿として修り

の報也。是又うりき形よて流の。三乗唯一

心法ちれば。仏のいとうりき也

一ぼくうとほんきう　仏の内法おくれてこれば

則菩提則煩悩也絶上実相ゆて更よ別の法

ちす

一ほうどく数驚数也　一ほうそびりくとの縁擔

本と定法とうく　一まんなすべき　玉と女

一ほうくうく如　朗おくう　一ほのうり　かれうる也

一ほうそちぐ　来取女のきうりうりざぬ也。そうそ

の地也　若后女はおとるーさるも忌用也　紙

也紙と付ちり　一仏のこぞれ　仏紙ー滅

度ー法へる。常住ー不滅也と流法也不滅

とうりちぐ。ぷて道狭ーどくど尼云のいを

色

一仏のまるちやうゝめへ　一ぼんじ　梵字也

しく絵のれとれうんべし　花氏帳基のうへよ絵とまる

一仏のありすちろ氏觀經云阿弥陀仏去此不遠

極楽荘厳ありひやらるこうろ也

一仏ともなりのうへ　紫の我らのものも也

一ほよいでぬ　中元のほよ出でまて下に地云

ひのまとろんでの奇也のすさハほよ出

ぬ地ちれぬ落とろ云一義云

一ほらうとだこうの色こ一ほとけハ　経云實語

不語者こ

立りこうも也

一法性寺ぼうし　頼信建

一仏のをあてよ　仏のつまり

一ほろうあるこうろ

見とろり

見ん名香の蜜とまくまくへてぷうさろ也

一ほつえ　本也

一ほく　反却也　ほんぐど

ようもべ

へ

一べちまう　別納也　蒙よろうろ也　普賢人乃

位也

一へんぐえ　変化也

一へいちう　花平定女ぐあさろ也こて平伸字治

大和物語ニ云 平仲が女のもとへゆきて ちかく
すはりて 硯の水入をとりて よりあちて目を
ぬらしけるを女見て墨をまぜて入れたりけるを
しらずしてぬらしければ女鏡をみせてよみける
我にこそつらさは君が見すれども人にすみつく顔のけしきよ
人にすみつくとはやすきけんとのことも
一へんばうひさ 文字のへんとつくりをいふなり
とゆるなり
一へり るどとよむ 瓶子
一へんげ へんげの身と知りおもし
去やく飛鳥也
て河海円生の中に化生と云べき事を延べされ

どくさいハ劫初の始より化生なるとはあるまじと見えて
されバ今の変化と云ハ仏菩薩の神力或ハ定
力よりあらはれて其人の業を感じて形をうつし
と現ずるを変現とも生死をはなれたるを云也 布袋
和尚ハ弥勒の変化 寒山拾得ハ文珠普賢
と云がごとし 委くハ上下略之
一べつきやう 賀茂八幡社家の時四位四人五位四
人六位十二人をめして具して社神前ニ東経を
よませてつけるや それを陪従とは云也 并此
所の陪従ハ近衛にてかざしの人也

一ぞうもくてるく　玄三の我ハへぶそてるく　ゑうてる源氏
ひんがしてるくうるまぐさのんも
一へくてるれんぐうハ　玄法師　ちれじ兵ぐ三も

と

一ちうかさめれば　時うくハうゑ付ようてよハ　ゆへし生
人ゑくまくくん四一とのの　井戸
一とにえのとれ行す　もしのうちも
一とぐさ　ちやくとのんも一とびさも　何うてるもも
ぐうん
一とにしびまうり
長限平　孤燈　地蓋赤紙　眠

一ちんちうさ　也食　作くくいるも今気色よと同
一とうちとれ下をとるも一とまうまるも　本書よと
とも
一とぐうまぐーのんも
一とうりさんれ出ーやさんのん
一どち　苦也　夜ぐち　安ぐ
とうり
一とぐう　悔也　俗馬系
系ノ泊也　とぐうハ　慣也　ちやくハ　性也
一とうもるて　動也　一とうで　ゆん　れ出　結也
一うちく　ちうち作　ハ　畫　乃　けうね也
一とさ面へく　外ぐう　へ影　ぐうんも　ぐうぐう

ちるべし

一とげぐさうし　は島わ
はなはつれちりとさ海ぐいひちるびり行てゞ
ひさうへしとこづれぎ〜んハとあ〜さとちり
一とうゝまうぐさ〜ハさうちのてとうちるどこゞそう
ぬやゝにもひつれぐまうぐ〜りすうぬも
一どさやゝのゝ　僧経聲。僧ちるべし小
声乃あうぐ経歩
一とひ　ゆも
一とひあうて一ゝびゝ〜ハ優曇華の支ゝ
壽八万歳の時節。金輪王遠四加其時海水
半減すうゝうて出現すうちり

一とこゝうまうつ　獨鈷　一とハぬとうゝさはく　辺
婦妊中ハいゝべゝとゝとゝすとゝもめうけうどの
いうとどのゝ　一とまうゝ　とまうゝ乃ハ
湯ハ菱也。ゝとゝ　ゝうんとなゝ　ゝ息ゝのゝとの
ひよあうのひ　心ゝはの先ゝ行也
一とうゝのゝ　西洞院とゝ東洞院とゝ
めべし
ハ弘微度のゝよあうと。梅壺ハ又登花度のゝ
よあうゝつれとゝれちゝ度金也。ひうれゝら
とハとゝ日金とすまゝ。麈ゝひうれゝうちう

一とのゐのときかたをとこはげらるり夜寄夜明
すると落るぶんのとゝへてあの屋内ふてこハづ
れとゝへるゆべしとゝろ一とゝひとりとゝ夜寄
山林抽ゝ宿帳ゝ夜中時花陣毎刻終
行丑寅刻八右陣勤之丑刻物節一人申
宿申抽由ゝ略之一とゝ四ゝゝ虎狼
一友ちとゝ我ひとりとゝへゝ多ハ友をつれ
てゆとのゐゝ夜ゝのりゝ夜ハ又ゝ夜人ゝ
あゝゝ事ゝやゝゝ全一とゝひ夜人ゝ
一とゝやゝに夜撥ゝ也ゝゝやゝゝ

一とゝひゝゝ波風ゝ弄十二三歳の時遣
唐使ゝて波斯国ゝ到ゝ胡琴壱挺行乃
者也阿修羅琴と造てゝゝし支ゝ夜ゝ
つゝの地治ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ悪風ゝゝゝゝ波斯ゝ行又梅檀琴
ゝゝゝ琴とゝりてゝゝゝ処ゝ引て琴とゝひ
極てゝゝ霜宮とゝ天地とゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一とゝのゝ夜ゝ節舎弁中の節舎也
一とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ親と後ゝ也

一年ゆうそうして文の法をして 薗毛公園の文
三ねまでも 一ねぐの大きやう 大政
大臣内大臣新任饗食のうち
一ゆのようつき 筆取由也ゆのうもたのう
あて紙をまるうしとうとう 年忌 一祝ビ
こは十ようつをうもたは年満
一年月つぐうもれどおぐうもたがれ 以何
赤摘表は同むづうれ文をうんあるぐんぐん
の事をうもう
一ようをして 三のん面
むづうの文を為てうさいさいたまや

祝んじ祝うに投監よとうれうで法とつしと
どうんうもも監うもうんてとと三てうあれば
けうまうやと眼うと書つて 弄ようとて三の三
と。我及弄あてはうるしと。盆うつうも。むとめど。
一ようをあうぬやうに云ふうも
一ようを 拾遺集よ世の歌あり。
一多のぐ花やた 多ん一越 涙雨也。多の手
よ感じて花は鳴 鳥。也の水多ると 鳴うとし
一どねうどうさん 花とねうハ近 法を云ふう
梅ええ
一ようてて あうてハ奥也 昔ようくう也

とうハ外也すまゐよりてを
一つるゝとうまうのてとうけうろう
一まゐ三人の宣旨ちう内侍のまとの宣旨宣旨
と内侍と兼官ちう人やぢ湯まいうう人
ちうべし　一年ごとに主殿の御手に
ゆう人たの乳母毎年ちを御手を御又をかま
れをしうへうとみうう一ちうすうとうを　雅右
もうことごとの主也一時ゐるゝぬ雪表とうを也
河海うしうのゆううび琴をひうこうるにおそでの
うへうううううぐけて花のごとくまうる人一ひうくま

つるに。六月十日ゆ雪ゆ雪ゆつまのうとくこ
つまてうぢ門ゆはまたにおぢうさてのおびまこ
のまうべハ免づうきうもうもうぢハ色つうくと
ゐうもずうこ此門ゆ月ゆ色ゆ雪ゆ
はとちんゆまうこのゆまハつまうきこあうとゆ。
あやしくううしきうの色ゆ外ゆ
一とうとせうれバ主の色乃せまうう色也
一たうとうと　柏木後。三年ゆちうぬ
一とうのまう　源氏湯後記也。隠岐記ハ
雄ハ　雄ハ雄ゆあぢうとくとゐうを色とゐうう

一とのゐすがたをもてまいる鏡とさしのぞいてこさうづくしぞ。紫式部日記に紫式部が童殿上びとのすがた
一名のまゐる　王朝云ふる所の山更幽山の名也
一どうもとれど不動一とのあり　殿日也
一寄うき舟　常盤木なるをまへり
一とうもの　一とせ云ふ十月又ちをぞ。
一とうもの　灯台也
何ぞて色用ゆ。うりの女一乃こやにをとりけ一
ゐ似ぐり　一とのうれしくて　色香の
童名。体初とと書。女とバ父ちどの官を時
夏常の夏也

源氏小口卷第二

ら

一長恨寄の話也　白氏文集の内ゆ。　玄宗
の楊貴妃をとられ　玄宗
更衣をとられ　ひ一同じ也
一長生殿　玄宗の話也乃名也　桐壺の表。
ちねとうそ一とあつまる
一ちうぐうの家だうどいの人也　家女
ちぐ一こちうの縁物一ちのうらも　みちひ家
塩のとは源のんさぐめるたとよりぱとや

うくもとちぶのとものもの
一ちやうのぞくしちどの延喜式云凡齊内親王
隊行隊官之監送使参議一人或中納言弁一
元宛之
人史一人六位以下官人一人西文云太政着陣
官之前大中納言各一人参議二人四位四人已
上勅使中納言参議各一人四位六人長奉送
使中納言云若参議弁史中務丞各一人已
上奏問下外記云作式アニ花今案辭行の
日は前と勅使とは河原まで供奉して帰
参る長奉送使ハ伊勢まで参るひな

つ上洛の時に攘夷すべきことゆへとゝくは
下ゲ着の由を奏聞されがたきゆへ職事
して作らるゝも何捨遺集の詞の
引つ
一ちのへうたまりのふ
古今老後仕懸其路仕之車孝経註執政臣
致仕例略之後仕といへは古今よりて出仕
すべきことにて出りちゐる車を先
私の朝臣なれとゝる事あると故に懸車の齢
ともつゐも官を辞とゝ致仕とゝ
多へきこと河海よりもとゝ

一千枝つねのり　千枝常則　左高右縁共以益工也
一長恨哥　王昭君　楊貴妃ハ馬嵬にころしあハ
れ王昭君ハ夷狄にとられ給ひしと云うた絵也
一ちうさすと　弄たのよみてよするし　桂琴
にてハちうと琵琶にてぢうと云
一中將のいれはしきのむつび。和月鳴を荒
手番文日をさすて中かなる　花の手結も右近
の真手結也。和月ハ月よりおこなはるゝ中將
右近ちらおふの花のことをいつれてあらんずる
申也　弄くつびハ馬ゆみの時二人はくけ

て躰なる絵
一ちうぐゑんよちりぬべき
ひびきまでつゝれんや二　仏の中間あるし
一輪袈裟　ちりけさう遊ぶ也　一ちんさ　地鎮ハ唐迄
に太紋高麗へりつけてある也
一ちす　帙簀　書物の帙也
一ちやくれいのつぎ　智積院の庭のやうさぐのこと
はつひはなるへあるべし　一ちハハいとくらいるあるを
乳のうちをいふしろくくるゝん
一持仏　持仏堂ハつくさたてられざれとむせん
仏供養の用ことや　一ぢんのふハ　擲やちんハ

沈也
の香気名
也
ちやの花とらるきろと云んし
一ちりはい 玉ぐつ香よりもちりはいをきてを
アと云まどかゝん やうの誤読也大李翔とふも今
ことく云うまりめとれや略く
一ちやうじろの丁香也
一ちうきまの迎(シンギ)
一ちりぶまりきは丁
り
一りもつれすてあまひ 何事ても行ぎまゐる
分のの子をするを。臨時とも
一りむじの祭の御神楽 賀茂の臨時の祭十一

月よあつる中也。当日ハ仲の酉也。是をきたこつり祭
と云也。酒宴ハ午の日也。内裏書也てあるも也
一りちのちうへハ 律(リツ)ハ杖をたつさざる女と杖
をつきざるやばてるハ千日あれど。名ハ杖よ
属(ぞく)まて
舞也。今ハ絶るを 一柳花苑(りうくわゑん) 上古ハある
一りんじきやく 客(かく)を
きやくとらもいべし。六条院大臣あまたを接待
の職(しよく)を兼る任(にん)あれバあらずしてえらるゝや。
正月二三日のる客人(きやくじん)の手間かれるをいへる。
行(ガ)祭ころきるど御用也

一龍頭蟠首　竜ハ水ニとゝまるゆえ蟠ハ風
とゝまる任まるゆえ故に形を作る
一りちをべつぎの物ゝ　りちを次呂
玄律ハ林也　日本ハ呂律　唐ハ律呂　本ハ律
呂と云律ハ陽也　呂ハ陰也　ただ偽るゆ
ゑハ呂律とゝして律を次にするゆえ去をまき
れうと　源氏ハ林ハ　謡曲ハ偽るゆの
ものゝ　呂律と律を次にするゆえ
馬ゆゑハ呂律とゝ付るゆえ　本朝伶倫の和
偽ゆえ　呂律を陽陰と用ふゝ

一りんのゝ　ゆゑハ陽ゆゑ　我引とぷんのゝとゝ
うもく　ぬ
一ぬぎすべし　ぬぎすべうゝうもり
一ぬうぐく　礼拝也
一ぬさ　祓麻　榊也　祓ふゝ
一ぬさ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
てざうぐゝ　ゆゑハ物ゝ也
一めりうゝ　泥みて　ゆゑ也
一めを人　賊人　負家ゝ　ゆゑ
一めさうめう　指物の　ゆゑ

一めきまあへさで　玉ハ斜めてうちさとしっかれ
ぞるめきとあめ玉の代ちるれどもも
る
一ちうち　むぐらの童名
一ちい　親孝也　一ちてんこぐちち
轉三男中。恩愛不能斷　辭息　今云為
を
一ちうか
をとうめ　いひをとさんとすんし　陷
一ねとのぐりまぐじて　夜著　夜著同
鬱長恨やぐてさふ〳〵ちをさ交衾のそけ〳〵ふ

ふも
ふんも　河　程
一ちをとうれいとうとうひさ
一おさめ度　納度　結度
一ちをよすけりておすう　助　及　成人のんも
一ねとうとてまつる　葬也　一おうぐとつふ　動　遠
一おりぐてさ　面目
ゆ成ちも　愛石
きも
押　立　日本記　俗ハ
一むめ　泥　賠　下也　賠
一むて　紐　也　ぬるけ
ぬるうぐ　ぬぐと　ぬ

一たばこ　やうとうの
ゆをもぐらくるもの
とうしあををぷかるべし
一たばこ　まきあのあらひさ〜澄酒也　はあを
ををぬ東底絲びさ〜ちるべし
一たばこ　ゑんの江ちゑんもをんも二人
みていろ
一たばこ　そまうろうて
元服の袍の腦ぬをぬ元服袍
の腦をあひて　茣ちるも又濃茣
きをいろ
一たばこ　はの酒

一たばこ　さばく
ゆをぬぬとはのあ氏よ　茣の左
一たばこ　はの盃酒ハ茣ぬて
ぬ盃を　はの盃酒ハ茣ぬて
一たばこ　御とはをあのるし是ぬ大小あるも
男ぬ東節　ぬ茣ちるぬ大御ハちるしぬ
御ハ男ぬ小御ハ女のちるしぬ　御
擂ぬ　ぬてくるる茣ちるべし　西宮記云　木物枝
物共菓ぬ　茣ぬて　菓

を入てあまく擬或も松に付し。大臣以下ニ称して後にハ
膳部にて調じたる元服の時の人乃さゝげる
ものしるく
一おほあく　ぐんぐ乃足也　　一おはりとの　大臣家也
一おさく　嗽とも云。或ハ頬又ハ更などと云也。　かゆる細し
優長なる事也　面貌らしきことも云也　あるハ
ようへし
一きのかく　河　各競　　一おほとあかう　池沢也
一たはぞう　大惣なるの心　八雲抄によれくあるも也云
一女のうれハをさと。おやんにくきよきハ　女のうれや。

きとハ微字也。縦つてましきはありくしとぞう
一おひさかたの家のうち　親の家にある也とぞ云
あり。苗字揚家有女初長成養在深窓一人遠
識　長恨哥
あるも河　穏
白説きし源氏をも受よるして三夜又歌女よ細て
みなさも
一おはとた　大やうにのざう
一女めてみさそまつりまる
一大かさ　十の物。七八とのこ
一おはとうかはる元服也　一おはやけちうめかしく
鐙人よ根ありくよとめなし　一あさとぐまし　鳴呼なり
きるうすもさ云
一おどろく　きつと　かうなる

きんや駑馬(ドバ)のくるまもおそし一おそくゆくをおそしと云。
浚ことたいと云事をおそき一おそくて少き醜をとし
なを銭を也俗(ゾク)にはをしくのごとしと云ん也
一おそましく形遠(ケイヱン)文選也手まし見そくおそ
そしきん也　一をようひとりを小指(コユビ)
をとひとつ也　一おはりあるとふきご也
一たいきす　おりまするの羽也
一をくしく　おぶやるらんやゆるやるらん也
一をとめきそ　鼻(ハナ)のうごくんや物しきうかつき
をと云　一おもし　不　佐座(ザ)不也

一おほめい　俗にとおけるのとりうしらさんあらう
ことおほめくと云し一おほれ　おほめくと同也
一あさへさせて　ものをおさへるなり
一きこらまそ　うけるとし
一おはちのさ夜　陰(ミチ)也　佐路(ホソミチ)也　大路(チ)
一あのれひとりあきれ　ほうもひとけるか夕白をとぞ
こともれ猿てぞきれほうもひとけるとぞり
一あちこちん　遠近(ヲチコチ)也一あこうり　病(ヤミ)のよくある
を病(ヤ)むをえるといふ　彳てもあそるをおろそと
の悔怨をおそこうると云一おそかきびる　荒

ぎれと云説もあるべ年うつるうち輕也

一おほきなる作也ひつけのようのん

一おほけのなく　天心詩我はあらあと成ぬ月ひけ元

とりつ

一ちゃうちゃうひと　行人也

一行くまうくうおくあるきんや。万葉ようちくまへ

とうりつ又製日本記一むひうん　ワ葉八巻也。

家を尼の分ようとへうちんうちうちうちうち。

巻のうちをとゆへ潜るうれうにちりくるんうや

一にるでさ海まるのし給　巻のうちを西氏ようの

じやうにあるようのうちのうちのうち

物也。そこの石の青めりて油にまぶれたる物を秘
蔵して。弱者より所用也。故号秘蔵。そこの
はの物絵。ひそくのつきぬ。今あふひそくはあとを奈
硫黄也

一たどちるに　せちりちるど
のちりさま也

一たどこあるり　月西日又
日よ。高津の梅子。月より梅子とあるを
うひて大家をめぐりて。男踏歌とハそれ
とまうるぞ。代ハ移て。今の世にくの松方歳
とてあり踏歌を学ぶとのこと。花多初春の来妻
一たひちるとうと　上の沼よりくあるくんとのこと。

実ゑ生ちるとうちを絵　一枝ちるのこと
大ちこに春ちさと云ふ
一たびくとかさハ二月　尼ぬ九月より実ハ
ケ月の間ちるとうてナ月海月より除服ちるよ
ちと也

一たしうあるり　桐
帝ハ。源氏の氏ちとハちりの物也
一たび中将のちりぬ。ちるとハ
ちり　新ちる　駿直衣人　青ハ直衣のさんと帝
より用ちる也。今の世もうと上の氏ハ引ちる
のさんとちるうこの主長ハ二監。或花田を

年にうて着もて。源氏ハ宰相中将。うと二あるの名也。頭中将ハ年ハまさりてれど官ひくきゆへ
ゆえ。元二藍の直衣と着用もべし官の高ハ
ハ宿直のゆえとりちがひ。官のひくくハつりさくゆえと
用ゐちがひ也。花童葉乃巻ゆ夕雪乃宰相中
将のもとへのぐ。源氏の君乃ゆえ。雅楽儀
のちどちがとる。元二人て二藍ハうれどの給
へり。北参議ハ。二位三位ちがひ中将をいふ。夕雪ハ八座ゆ昇進しあるうれば。花田の家
とゝとさるべきゆえ也。柳の巻ゆ源氏ゆ

とうと二藍ちがひ。ゆゑ。ゆうつくれてとあり。
の歌中将ハ元二藍なれば。つゆ直衣ハ
ゆとゝとゝ。代直衣の君に下袴の名を
りちも。禁ゆ人冬。蘇芳面白堂裏夏二藍穀
ゆ。今と直衣ところゆ。
冬と用べきゆ。直衣ハ人の下ゆ
りちがひ略儀とゝ
一ゆ。やけどゆ。
一ゆ。

ぜんそくも
一はちをど 源氏のをどとう
はのをどをのくらも 一
源也ぐをちくぐをとう
一はは五すくく 常れ袍は落葉を着して裾
をれはのつれも変也。変長は裾をとりはを
ちる紀也とをいつべしあぐれとられるとい
とそのんだくさるべしぼはさみ八王の字也。六八
のすくちどえんちりぐ又変すぐくを外はは
ここすぐくといふ流りこをもおとく 源内侍と

源氏のおさまりまりすぐ時とうぐくとら宿也
一行しう 男くちくも 一おやをひてくら移れ
也花 村上は女。親子内親王。天延三年より改
元まで下向し給ふ母儀女王 重明親王の女
てくぐりあくりぐまの和歌ぐ系は是ぐと徽
子女王よりすくくて中絶れぐるとされ母子
あひをひて下向の餞あるとうてぐくはくるあ
べし
万葉女日本記し女 一ちとあより 未通女子
一おさえんくくハ八雲おさあけ 一たりあるよてをを僧
下女也。くりひとま

一なり。家中より物送り下女也。不浄のことを生好の絵二幅とめひれてあの掛を結合てびたをひちよりの話物也。びゝ女ひとりとゝ云濃也

一おなじく夜 毎年攻京の時。大和路をとゝて。指ばは遠て。瓶波めてゝ〳〵みてゝ。七日より大江の儲所より付給。十日より入京し給也。故に大江夜ハ。毎夜飯京の張籠也 畔 代一夜毎夜の張下るれど荒ゝ物とゝ〳〵ゝや

一去年今宵侍清涼 一夏賜の代夜ハ思ふた恩賜御 夜今在此 秋憶詩篇 独断腸 榛将毎日 新餘香 聖

廟家

一法ゝ〳〵ハ法ゝ物ゝ法ゝ物ゝ法ゝ物ゝ

一をのえさへ　晉手筆貫石室山見　数童子の鬘
箸を質に物の如　東校会堂不能局　時人
抑概尽　既後時人
一たびあそび大法橋　一たびひそめ　松門の奏
まあさき根ざしとあるなめ　ひとりの人
一たびとたらあまとも　髮をもやもも。
一たびとあるひて　牛車　元中納言後二位　位
そひて八一品のうもの　内侍　位　如結
也位一位也　聽牛車也　寛弘八年八月奏
上菅原朝臣　乘牛車入待賢門上東門ホニ

一たびあそびとけるとけ　このあとのこと
ねあさすぐさ　一をびれうおさあび
れうも一流たやうるんれ
一たびもとしとて　各留半座　新
墓の墓に待　我間浮同行人　法照禪師
一をびたうすまうう　弄　暴進　人の迎
ぐうれも
一たびとおどろすん
あまうのさもうんれ一たびあるとあるで
九字一開　早下　さうんもうとハ堀下の公
達とこうるあり　大郷　食ちどもう　人数の和内

交をもあこさんちとうり
一たくた改大臣 内大臣転 大政大臣 例 忠義
公はそれを例多法 物よ要
一なひすぶひ 決ずくのもぬひでさうん
一なれうすくまるぬ
一たくたうさ 臆病也 不学なれば れいちうり
一はうりけ 面りり 経 ちやくすもぬ 源氏の院
今うけ 物語也
曰 満而不溢 一たとうあさん 老経
一なるやけごとさぬ たうの 騎射ハ公

るも中ふ 将ハ不射也 六条院ゆて 弓抜だる
よのうて的を射ちり 一たるーゆぐーゆて
さめん 為の後の 名ハけぐとと 内大臣
恥を見しうあぐひゆて ちぐさうんと 時
法也
大乗 二来 若 得 為 人 聾 盲 瘖 瘂 謗 斯
経 故 獲 罪 如 是 法 一ゆやちどのけう 法
論語 曰 子 游 問 孝 子 曰 今之孝者是謂能養
至 於 犬 馬 皆 能 有 養 不 敬 何 以 別 乎
一をうあひ 物て 凡 病 殺 也

一大原野の行幸　延長六年十二月廿六日
行幸を模してうのつとめ侍る事略之
一花れく　花は散てく　ちるを也　おれて年ゆく日
一花やけざ　花やけざ　ちるを
也　生ける花　ちるを也　乃至内侍のつかさ
職ざうしめ　つざ　ハ　ろ　ぐ　ちるを　ちるまやど
それども人ぐ　ちるそ　ちる
一たちぐ　ちる　ちる　紅の袴　ちる
組　乃至云　紅の乃　ちる也
一ちる　ハ八月廿日比　ちる

さる　花　ちる

一花ちるの　離ハ花を
のつとをちる　ちる　ちるの　ちるを　ちるの　ちる
一女ハ　ちる　ちる　婦人有之後義を離
用之道　故妹　嫁　従人　既嫁　後夫　死後　故
父者天也　夫者妻人也　源の養　ちるれど
也　又　実父　ある　ちる　次第　ちる也
一ちをうるとつけて　姫　ちる　女のちる
一ありうらて　ハ　家　密通　ちるをくちてよ
ありうらぐ　ぐの川　ちるみちるぐの　ちる
ちとハ人の妻　ちんと　ちるハ　ちるの也

一[illegible]中道八宝への医術なり

一たちすぐすと多ハ巣ゑ二変りてゐぬ物ともを玉を略ゑよりちて卯の一不覧ゑたとへくらう

一たばこさすと思藤一たをちてくぶる巻れ下第分巻るもやりるくハくうあらさ陰ゐれどもとうハやまぐこさとたなるれりゑゐ

一切れどれぐくぐ切灯篭とてこうれる

一女のとうてちんくこえれる。元寛年遣使よりたた待時年先年れ女事に有三家失とうこ

一たばこのまくらぐく内府ハ右設大臣ちればゐゐ

きたばこのまくらぐくこうこうこう

げらも

一人のんなら八物ゑたゝくへてのまへり

一おたきそゆくゑをもとゝ思ふ花は寄ハてゝもをしい

こゝろる寄せゞぐくの文字ゑ人ゑやゝとそゝる人ゑもゝ

ゝ

ゝ

みなてをとりてとこのもとに
一はるのかぜ　兼和尚
八吉日撰り
一はるのかぜ　源のれいとも
ハ又梅の花はのうつり
あしすゑつゝみべき人
の袖に
一ありてこゝ　花をちらし
れてゆく
人目あるべきはなとこゝ
一おもはれ　初はれ回ひとや
一ちはやぶる　王氏の
一はるのかぜ　毒ありとやとも

一物に
てもはるのやハ
の間
一はるの山の　松葉の
はなとこゝ
ひとりとこゝ
一はるのかぜ　草
一はるの山　松葉
一はるのかぜ　唐
一はるのかぜ　常
一はるのかぜ　鬼
一はるのかぜ　日枝
のんと大
のひとこゝ

一ぬでひろきゆえんや一をうつきうたのてちヒ
ちるどもきぶひろくまるべし
一ちをのごとこせ　加ゆてはまれうひうだ。たうへや
ゆて旨多へハ接ゆべ一乃ハすそゆけこをのゞ
一帯せるゞ中ハさもあるもの
一やうゆ　ほとちをき　琴ハ琵也琴ハ絵の也名也
一をきとの法　進食日本記　神功皇后紀北到
失前国松浦縣而。進食於玉嶋里小河之側
仍止元世俗ゝ也云ハくとひて酒とをこしする也
一ぬや　紅紐ゝ色　一帯ぬでき　ゆをゝ也

一ぬでをゝ　ちをぬでをゝ
ゆをゝ
とにくしをゝのゆえ　一ぬゝ　ゆをゝ
たのゆゝ
つけてをゝ　一ぬてをゝ　芸ハの神を
ゆるどもをゝ　ゆをゝ　ゆをゝ
一ぬでゆるべき　ゆ中ゆて山長ゆ
ゆをゝ　ゆをゝ
一ををゝやゝひゝん　伊勢物語。鬼一口
ゝり。江侯ゝ。小松帝時仁和三年八月武蔵

の松原に鬼食人是則大性也

一大うみのこと　日本記　溟濛

一なきとをし　けりやハ我中は伊のゐとうのまで

ちとせ

一女のまもづよ　法華経云　又菩薩摩訶薩不應

於女人分取独生欲想而為説法若見

女人說法不露齒笑不現胸臆乃至為法

不親厚況後餘事ヲヤ

一はれるる　髪のすそ　なれる物也

一はるこの　出家ハ世とのゐ　ひるれば。ゐる物

らをいとをそとれ　一なるのうさこと　部屋おくこと。ふ

よやもど　一をのれ。をゐるゐる五也

一れいこく　老也　一をいられはまして　ゐる

云ん和　函也　一をの〳〵　已ゐる也

一れさゐるば　奥中川　又奥長川。名ゐる也

一れと　侍者。女を云。或は仲

一れとゐひ　性也　一をとゐひ　ゐゐひ也

一れはいる　大笑　嬉也　一をひれをされひれ也

一れこうく　紅紈也　一は　おんとうむ。はゐ

うむ　ゐとゐ。ゐ　ゐとゐ

アそそうもんべきこと

一おほんべ　熟也。古今ニ曰ベ

ら云。大膳舎ノ也。伊勢

一おひろれ　走杜。総角解ヨ伊勢物語

ふれどこと

一たはけうろ　たはけうろ也

一たあうろきたあうろ　心一をもうろ百ふ反

一おばろけのうろば　不ハ少ス

わ

一わりなく　河　左新日本記　無破

一わづらく　一わづらだわり　煩下也

一われのうろきこと　ふれ我也てあうとたろ

一わざ　変也

一わざん　伊勢　伊勢物語　冊子ノ中ノ此時　今伝

一ん也

絡とこと。備楽器ノ字ノ玉宝也。あつき

琴。あつまこと。いつも。暗也。汀云。和琴

元ハ五三六弦也　年ヲ数て用ひつと。後ヨ琴に

ふりうろこと

一わうろうと　寄ル早上げと

一わうはやと　癒癖　祝ハ

世ヲ治ヨ　ヲ

一きうんとうと　王家ト云等倫　王孫ヲ

一わうるへいうろう　令下

一人也

杭承注

ばまいりて時。休息する所にて
一わらきとのハ 幼者敬不敵老者躰玄温
悲端寒氣併入皇中幸とあるなれ
のまいり
さうしつわれのたらちねと
式部式河海花色に委し 暦応門葛よりう
根をとりて。秘主の額よりさしあつて京の方よ
をもむきたるなり。作りあるところ
一わらうざ海よりうのべて おほやけよりつうま
つうずして。源と来るといへれたるものなり。花
穢屋きりんのぼりいでたるとのすと

ゐもたのおもてに致仕の表なりて。隠居のよう
とりもぐ〜ぷ〜ぷ〜よりあるまくといへるなり。
はく写をそぐるなり 一わらづうにてうづ海。
海の勢なり。花色一本よりはうつうれとあり
出るなり〜〜〜〜れハ。拍子もづむんもし。蛇口の見て
ぬ〜ぷ〜ぷ〜ぷ〜ぷ〜ぷ〜ぷ〜ぷ〜ぷ〜ぷ〜ぷ
さうのんぷ〜ぷ〜ぷ〜ぷ海とぷ〜ぷ〜ぷ〜ぷ〜ぷ
よりう
を来るとをもむきたるとのて。別の樹を持
なるなり。これなることのて。神やとるけき中よ

ゆゆしきのんも

とゝぷくとすむしきのふちとのうひしやぷう

て地いはまぞうあるきこゝぷの河を流ゲンちり

ゆるれどもこのんも一わるくのことに柳のうぎ

こゝろだゝぐされのあるあ花あをれらくきハ

柳乃ゑさ。紅梅ゑさひれのあるあとゑさるも

一わるハまゑるゑ弄まゑ。ゑ。ゑ。

されば。不詳。されハ六条院ゆてのうちも。編ちぎ
りくらし。北風ふきぬべし。机よりてをつくて。玉ちを。
袋ぬすくうて。千百千方とうろんて。袋よりて
よりひて。編帷とうろ云奇とうひてまうろもも
一わうかく　黒髪也　一ぐうまやこいふく
皇鹿童平　洲也　一わうて文さう　鬢
天気　和旦清緑槐陰合泳堤平　白氏文集
一わうらうたうやうもうかうり。和の字也
一奇花のうちとうじ　一わうやとれ　花のうちとうさへゆうりのんも。去乃名
絹とハ大文のうれ　一わうふまいり給　かえの面

日子の日也。都例多之。源氏のはなとを。若菜
て紙給也。十二相若菜。七相若菜河海要
一わう若さす　ととの影ねとハ。源を親也て
うち給ひ。あるれぐうまりぬ松とはるよ
ねるとうれかされる也　一わうのあのまの義義
一わうけうて　王孫　王孫の法相法ハ
あれとも也
白也
はとうとうて。とけゆうぬ。
うも也。ゆれうとハ袖ハ。柏とハ。夕ぐうれ名まで。さん

一わけゆん　ゆうゆうんゑ　れ家をとうこうけ
てぬれさぬとうをんゑ　やとうる
一わさ　ひるさく　菊の花を家にあそび
と　ぞのゑゑわさを　とうあそぶくの家よりか
也　後撰　秋下　奇　紀出　ゑ　ゑ
一われとう　武蔵野　よ　ゑ
一わ心　ゑ　ゑ　嬉　ゑ　ゑ　ゑ
しるれ　ゑ　ゑ　一わ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
ぬて　ゑ　ゑ　一わ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
聚　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

一わ　ゑ　ゑ　寝と根　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
やとう　ゑ　ゑ　小堂　裁　萱　ゑ　ゑ　憂
一うゑん　食　ゑ　ゑ　ゑ　飯
一わ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
ゑ　我妻　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　唯識論曰
云何　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
障　ゑ　ゑ　生　ゑ　悪行　ゑ　ゑ　ゑ
戯　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
一われ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
一わ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

一わらはの　嘱俗うつもの

一文良　四位　給女の勢名也。此門の此所をり
か

ゐる時。あけうひのかへるとて文良といふ

一ゐんぐちめ　乙郷也。太

ゐちり

たゐちどのゆをゐ云ちり　郷とゐつゐ。乙

郷也

一かつき　窓也。

ゐ也　窓の字也。又冊　一かうえたうび　可

畏之　神　日本記　恐也　たうびハ天子ゐたる郷也

一かうきりとて　いつきりゐ　うきりとハ。性れ宮也　合ゐと

いつきとのゐ也　一かくちぐうきりゐ也

禁中　ゆて文良のとゐとくるゐんをはらんを

んとも

一かつきげるたうきゐ

こゐつと回ゐ也。をゐれあるゐ也

一かつて　陽　一かつきるに　敢　数

一かぐとゐこつけぐとゐ也。ゐのようゐてうりべきゐ。

搭　ちゐをくゐ也。誰　うゐちゐ也　ゆ　章

さうちるゐ也

一かつみ　河　記念　桂仙

信　文集

一かつよりやと文良

のくゐゐたくゐゐは　遊　ゐれば。義　又ゐるも

そそぶ　ふる　用ことばとなり

一かんざし　金釵（カンザシ）　一かうがい　笄（カウガイ）

一かんこん　勢（カンコン）也　ちうぐん　同性

同ぐんこうとあるとちうこうとうむべし

一かくやくひのぞく　一条院の御ぞ。東門院の氏

入内（ジユダイ）まうそ。花園（ハナゾノ）まうまうまうまうとちう。紫

花物語（ハナモノガタリ）よりそ。南北の御のもとをうつりし地位

よりそ　一かくさく　一かくさの中将（ちうぐ）後（ゴ）あれ

ども北物語（キタモノガタリ）よりそ。くのかねうとあるとその人う

ぶり事ぞこのこと也。光源氏とくのかね

と同時代（ドウジダイ）よりあるこ。ねどことぞ。系式アこれあるもそ

ひる也。家まで代（ヨ）一巻の帳（ヒヨウ）也

一かくさと　頌（ショウ）　一かくさと　庁方（チヤウガタ）　庁厨（チヤウガタ）

一かづらひけまろふんまろり

一かづらくるまり　さうやうまる也

一かくうかくに　よのうとうとまる也

一かくれどくあれども　一かくさに　おまる也

一かくやうくずんやくはたづるんも。そちく

やうあるも　一かくるきにあるず

一かくとある也　一かくして　幸也

一かれくさ　あぐるぬ声とはいくるんも
一かうらん　槲于也おだ〜ぬことゝいふり
一かすまるも　山石のあ着金幣とそくあふ
あもとへくう。中川のこちよはとひのあとやひ
返奇もうくこくこくはるとその石あて。義源信
源あ國の壊ようるこれあやもその森の赤ぞく
うるとこれば第赤ぞくてくるやうあて。近く
これでそれは似くるあもとるゝ船はなを奇よ。
ゝるとはあくてあるとるり。第赤人丸の
奇源元

人名集
一かうるこ　稚のこあるとあくるくるとうこ人
一かつまこ　地ごまるのうにくるくるもと
うつまうこと云也
一かりも　且もうくと云
もあるとあるうるべし
今も門とあびあるうもるぷあのさあも
一かうこ　一かどはあるこのやくるる
一かうこ　ぬをこあどうして中門のうこ物べ
一かうこ　片帆真帆といふ何ろ
いでくるもくるはあくるも
一かづくこの祢　大ユクとさしてうづくこの祢と
あもぷ祢橋とのあのふゆくるる

一もののたとへさるもくを花辛酉七月篇云。
八月在宮九月在戸十月蟋蟀入我床下
一ものこころに因也ものやうもん
一ものの狂　獗者人那ままいるものも
一仏事　一九月八朔日うるし田畠の稔ぐも也。
三十ケ日の穢よりふれ始ようると。第四日目
ものも
一ものつくるうりはう。
うるるどいるもの。それようてといもぐく
あるとけるそうるもどいるものもとべし
一ものづ　かれハ義云教の跪陀尼の加也

一海渚もの后　海渚もの妻なれば后といへん姫
論也花首大都王といふ王。あらけいつ義
おうりけるを。多國の王。人ものとよれをうる
ものをいるれ行。この女俄ようをあちの王く
るどこひすもこ。ぬいのるにあるうてぬ
七万八千九百里をとおて。ようぐうにありそのの
ぬれをとうて。大海のそこにをけることを
受て父の王をひよ。多國の人の王をよ。彩
ひそうを返しうるゆ。善樹天女乃母
絵よりの。又姿竭陀王の八歳の女乃母を

王の妻なれども后といそんはおさ遠なる作り
一かのうしくそぐれる者ハ尼ゝこそもぶ髪をバ
そゝぐるのさうとさもとうり
一かハいくすとるて なきあひてゆのあ
くかゝる也
一かんざし おさるれはは
かんざしとをねどもゆくあけまゝゝだうれく
しうべきといふ也一やうちろ人のまる
大海のかはちどしてぶるたハ世のなかを
かいつさなあびてまるるこのん也
一かのまぐさうん人ぐよ 花ゝ尼ゝよ源氏のちる

とぶせたのくまろと。俗のくりのひとゝ成也
一かのうとう者を 源の小柴まて写ゝ尼ゝ
ゝ紙ゝでさゝまへると尼ゝのゝんしの也
一かのとまひこのりん 業のは毋ゝる也
一かゝやう ゝやゝとゝん一かずまへ 源氏のゝひ人
の数ゝまるゝ ゝかずまへ ゝかずとゝん也
一十月 うゝるづきゝ
一かりゝ花 内裏ゝりゝゝることゝ退出
の時ゝりゝゝ姿切はづゝる ゝづゝまても 裳束
あゝゝゝ結ゝ
一かねつきて まくまへゝ

ねぶくとつゝまりてゆねつきてどぢめんとてよ
りどちぶりハロをとぢて如来をつゝめをつゝ
ねつきて如来ねとゝ八僧ちどの偏袒乃時。
法義者ねとつへど威儀帥磬をするゝすを
後八偏袒をやぶるもぞんをもを通ずるなり
一かゝしをひとゝしゝ ちゝしどさもえゝ法ゐもの
一かゝこのゝをもだゝもゝ場やさゝぐ回るもし
もを休宮也
一かゝなひ ゆきちゐ人のゝをたゝ人るゝたゝのを
一迦陵頻伽 聖主天中天。伽陵頻伽聲。法花経ニ

伽陵嚬伽在声ニ勝リ衆鳥ニ。或ハ迦横賓或ハ
伽陵嚬ハ者梵語也。伽陵ハいとの中ゝゝと唱也
一神ちどゝたゝのゝ大蔵云。ゝどゝ法
ゝとハやゝて同元延元の大井川幸ゝ。富小路
の内裏ゝの法服乃親王の七歳ゝて。舞まゝさ
せゝゝりしゝぢどゝのゝゝゝを法しゝ乃人し
ゝはれぬ人八法ゝぎりきぢゝゝちひゝるやうにう
ゝゝゝゝゝゝをゝひゝゝゝゝ。ゝの神火ぢゝゝゝ
なゝゝけゝ
一かゝゝゝゝ 舞ゝゝと法
のやゝゝは立火ぢゝゝとゝゝゝ。法代也。教化国也。

十人のうち特に能諸に四十人の内有帝
二人破二人恒代三十六人にて此諸よりのくずを
ふるいにとうをもるさのもの輪基の輪作にて。
輪基よりも丸にあらざるも
一ぬぐいのうみち　輪のうざしよりまことの三本
は枝にとり又花にとりぐすもちるを
遠くるとあれば常に紅色ちるべし
一ひんぐちめくちはこれ三宮とすむとうり
一かきあををどうり　何をもくうさをい
一ぬくぐり　蝙蝠にて
つり

扇を作初りの色。常の扇也。仍て反扇の異
名也。指扇よりわるず　一ぐくもうよりうん
定意なれば八八ちくう。親行なるハ又ちどひ
きんこうの反流仍也。鄭別の其さ
ゆ代。和天の写しをもとも矢を卓文。
白頭吟と云奇をひりておれば相如れ
とうて。義とおりるも
一かくれるき物とうきは淺さんとも
一かくるどハさにもいそず　花　花言葉はハ拾だ
ゆとうて。葉和ちし　位天暦三年三月十一日。二

弟院花宴陽成院同月十二日内裏仁壽殿
花宴。各有詠歌。春宮嘉春宮博又地下伶
人ども召て殿上の舞ハるもの也。此物語の
ひ。面白もあれ。おもしろもあるもくるしきこと
一かうじもなくやらず。篠師也。秀逸ちと
毎句よ感じてやらず。俗しのもとへ
あれ
一かうじべきかぐら
花つぼのんもり。正令婦ぐ斗也
一かぐら　くらきあるより伝ふろハ。仕まで也ふ
ちりぬさ。ハ上藤のきる也。汗彼。殿上ふ

ゆるり
ぐりすをいふ也
のそうちどのするもの
法師ちと怪なるず。ちんぐるもそのぞんといふ。
一貫とも名付る也。迦陵のね監将曹衣生
を。一人つうりあひ
也。職ふるて身ふ
生仕のこびよの所
こびて一人ぐり
也。紙令納云ふ大将
一かうの　豪家也ぞんり
一かうのどいぞんよ殿上
法師ちと怪なるず。ちんぐるもそのぞんといふ。
一貫とも名付る也。迦陵のね監将曹衣生
を。一人つうりあひ
也。職ふるて身ふ
生仕のこびよの所
こびて一人ぐり
也。紙令納云ふ大将

二人を陪臣人にゆるして六人の作方をゆるされてあ
ゞきとりたりそのゝちよ孫賀ちどの時に御監将
曹府生を又二人で奥すると一貞ともうの作方
ことにあゞもゞれもこれ地下のことゞゝも義人の
ゝとハ度上の義人の御監をゝゞそれを一貞よ
ゞきとりたりゝ例ちゝゝ又弘孝の時へたた
を高監曹ハ女陣よ作ぶするにゝてゞくく
し此一貞よりゝゝするをゝゝあるゝもゞ
一位のゝと系ゝ位ゞゝ記るゝも例ちゝ体ゝゝビ
弄ハ得ニ云山物語の歌言之作とゝ位べ。源氏

ゝるをはゝんゝゝゝゝゝゝゝ書ゝゝゝゝゝゝ。源氏物語
記
中人髪をゝめ人也
ゝはゝあゝゝゝゝゝゝゝ

故文雅行の日ハ。西川にて猿のるゆあり怪
の風ふて中居内麻を なるゆわるゆ也
一かのもくもう花はなまへまうて 宣命の河
一かもれいろきよんわうに
掛畏
内給ふい 孫王そうこうもべし。孫王為故
院例墓子内親王 文徳孫王中務 惟彦親王女 仁和五年上方
宣孫王例ハ一度。紙おはくとわくざわもとうと
ゑゆ。花ゑ花ゑ委
一かけまくと 仕おもちゆ
とハ。昔ゆがゆんゆ。おさくがなう給ひゆ
ちどあれゆ
一かへさひ 辞退也

一かろめろうぜらうて 輙 哢 せうとゆ
一花ゑ里 一かうのおれを風 天雅彦門之湯澤楓樹
田文本記
一かうゆ 河 楚屈原
うこうゆうれうもいろ 一かとうのはゆ
らず
縁直宜。絡とうとう 侯絶をうあと 優也。絡
いゑも平絡の並宜也 白絡のうとうとう
絡也
一かんのゑへうこうへよ 哢
一かづのとうに 層檜と云て。層れ声をうゆ

すに毒とてうぢの毒なり四〜

一かつ地ほうかつ地ぶづきつる地也或海ほ地と

ゝく呼則るべし。社間々この地よりつ地と

云もぶわきりと云　一風あくりてハいぞ人の

胡馬嘶ハ風越鳥巣南枝馬ハ北と胡国の歌也。

仍ハ風はわれを煙をたくしてゆゑ也

一ゆうきとゆうとゆゑを花廣凌散ハ琴の秘曲也。

嵇康ゆ華陽の亭にて神人あひてつたる

所曲也ぶ神人ハ昔の冷泉の変化也

一ゆうのゆの格大納云　織負令云大納云二人云

金の文のとくゝゝばゝ人のかいつもどりかゝれば

格の字をゆゝべきもの也。寛平遠滅の人と。三人の

うちふ格官あるべきゆゑ也。ゆゝまれる官のかと

ぶつまる格の字もとゝべきにうりて源氏も格

大納云とゆゝれるゆゑ中ハ公卿人格十人令

まり

人ゝ也

東路の舞人すゝ人ゝるまゝ舞りてあをむりと云

地とさて神社の名幸。関白のかゝ春日詣

ちどゝ奥ゝて社次ゆて来ゝると舞てゝ後

馬場にて馬をとりてすまつるべしはたをの客人をしりぞけ八幡宮時条ばかりに八月上
旬雲客群人とり源氏の名伝告まうでさせ
系人十列を具しまつるべ
一かりまたのごの古まうをまひて花長徳二年
八月内侍堂殿千時薄たたまつる四月八日童六
人為随身三年十月九日新賜たたを侍所
生各一人を宿各三人為侍所別当童子云
今案ずるに八幡宮ひそかにまうでさせ
ごのりとゆひすらしみくしげどその義未の

久不見ちり水干へるべしやうりさめくるべしや
侍方とゝとどちやかぐべををあべさにやいぞれ
もうくるの指様をとゝ侍すは堂殿八六人
と見てとりこれは八十人とあり又離云童侍
法ちり國史ちどうもまるさぶされどもはけ
往をあるとゝべし一説は流
ちるべし一説は流はは書ハ郎流様
唐寺蘇姑射刀自荘子蘇姑射山ぞれ
古物語也
一かさうんうさるく
ちりつうん方ちるもぬ此は不明石は巻の冬色

一かんやうこうしさいぶ紙だいて時だいて鞠
うるも。紙色の人神にて色紙すき出をとる。
うしさい唐綺やうしの手物也
一かこうかきりうして紙をつぎて云されぶさぬ
のやうゆとちくうけうこうして音八絡より無
今ちーやとの何よ中納言もきんをうーぶ。
ひはせゆはこ御りうき紙色をうてのさあ
れべうこういこうこの法をうやう捨遊さんの
四云。絵義云。紙色よあを馬ひけうあとこ
一かこうるる 俗よこうしこんこうるも 罠也

一かうこうるべきあるを時嬉堂こて紙
をこやうこうこうこの法をうやう桂院陰陽師
うこしこゆうや 一かりれぞ次こうこの
れれ衣来を今云也。義法云。位の衣装也
一かうるこちぐこもぐこなる云。柯子元毒こう
一かぐひうげこるのひて時 秋好のこうこる
て源氏の一門と繁昌時をん時こうも
一神こびうけうこ年月のらう 源の久こき紙
暮の方を云。神囲又。神宿久こ久こ
又久 表こも
一神こぐちとこうこ

為雲くれ法。桃園、えんちゑくの義よりて也

一かきつめて　雪もよハぞの花也

一かつらの下風　糸の眉よ。桂ゆゑにて也

一かりさやハうけさやとハひのさやハ也。

笑顔の花　袖ふていろ〳〵て。除脂のこそぎ也

とりとも。若竹よそへ〳〵

一風のちらしけ〳〵しくるー　文選　蒙士賦

序ニ流素侯微風ニ頃ニ四風力　蓋霧風の

力ハ内ニ在度。心中ニ鬱きねば不成ことやと

いふ也。てしを源氏のちらつきさいちらべ

しかとさんるの不可成とちり

一風のちるは行よ　風生竹　枝窓間卧月照松

時基上ニ行　朗

一かけてゝへバ　ひとれハ也。羅ゆゑ

けのひとをぐ　ひとりぬ

ハ源氏　逢しこと　神よりけしき

一かつらさめちどさて　河　撥練ハ紅のう

もさを也。ぬれ　ぬるゝ　蕭てこゝべさ

を略し　ち花　撥練ハ　すさ紅のさめのわり

ちりを云。中びゝ　ちとハ小袖を云也。縦

ゐどさてなりへる所ぞ
一かへり　賽　一かへりてとざやうされ
ゝとゝ　ちゝき　唐東京錦　日ゆすり　肩之
唐の絲乃上ぶ也　花　今案白地浴衣と東京錦
とゝへるゝ也
一かへれのうちさらど
弄うちきハおうちきさわやぷひとへと云拍子ぬの
下ゝ必着ぷきれ　ふきぬるどあまりさく
ぬりるゝ也
一かよまろ　鮮の袖へを
神也
一かへりてせぬ
花今案　高巾　冠　高巾冠ハぷゝと高ゝ

白き縮ゝて色ゝとゝ
のゝ六位素人のうちゝ
袖ハ縫のありてゝ
ゝられぬ姿ゝ
一月ハ汐の名ゝ　蛙　日記ニ石山ゝ素
てゝゝてゝ　ぬ　の
ゝてゝ　ゝ
ゝの名ゝ
一かへりのうへ乃山ゝ　不見
蓬萊菜　不敢　童男　童女　舟中ニ　老女集
一かへりゝ　喜春　春系　旨也　反音ハ呂ゝ

律をうつる式云也。喜云系ハ黄鐘假の系也。
平調をわるして用ゐるゆゑ。可為。但黄鐘調
を律也。時々へうを律の呂をもちゐるゆゑ。呂律
次第
一かくさうゝ　一かくさうゝ　一かくへゝやく　大鼓ところ
一鼓の浮牧をもちゐぬと　枯鼓系のみ也。平調也。
次河盤海ところ　一かのでさゝゝうで撥た
えのをうす紅ゆて。はゆ更数ちろ系也。古今に
をゝハ撥ところこれちり一かくさいとはもとのハ名に
日本記中云天照太神洗陰陽若漾

宮ハ敷散　今春ゝ紀出ハ意とゝうべさゝ
やそのことはこと敷行と。天照太神のゝ
ゝとのゝる時。すゝ系のつぎとゝ行でつさうひ
をるゝ行時のゝるも。今をは系と弁が将。をて
いるれいとは系のりゝくちゝをうゝへゝゝ
ちゝくゝ　ちさ　色也　一かんの系　内侍督に系
つと行る。宴ゝ初てゝ。ゆゑ巻ゆるゆゆべゝ
一かくゝや　雅楽也。この行ん
一かずちゝバいとひや　九月をバ世俗ゝ様之
ゆゑ十月ゝハ内ゝうとさゝうゝれされバ九月

なりは命をうしろとそへり
一かの流はらさたちるる代 家物よ嫁合男。
必ず川を引きとこそ。源ずとかとこそけさう
あしてこはこねがハ家内の道の由也
一かさのやうゆて 父子とそ敗北也
一かりもの 鴨子。かもとりとこそ。又る相通也
一かえう 梅の系夏の菖也。系ハ梅花。杖ハ菊
行住坐ハ去方 一かすぐにはとそ
用系を震ぶてぞハ。るるもるんと呼べしとこ
笛を感じていう一かんかのこ 般名本。

仏時始起て仏人不覩仏法ハ
可系。日本記の系乃梅也
一かうさくはめさう詞也 還迹けうさくはん
一かさしても 系の名ハ ハ梅ハ杖
雪ぬと矢章生ゆてあるもとりう 梅林
夜嵐山尿ゆ今ハ課試及第之夏 系
風うの系の風也 博士よろんるる也
一神亡月廿九日ゆうのはとんぞ多院よ行幸
ゑ 康保二年十月廿三日。村上天皇行幸朱
雀院ゆ例をうりてゆ

一蓮上人夜咍　栢原朱雀院まうで漢武帝鑾
輿よりかくさどろまや東くれぬるも
一かさのぶつつり花をとりてまゐすゆるも
一かくさり咍　はをくちり
一加賀皇恩河　延喜六年四十六年はかがたうす
加賀皇恩万歳ふるとうぱ記よりかくさり
一かくりのどりくさ和汁とゐんも
一居下ちり　歩ちもぱ中将ゆ将どりうどもよゐ
さすもも
うけおちるも

一かくぬさてくさぬさ
ぱ殿開白社寄せるも　一かくさ
とゐ寄よのかもぐくあるくさ
一かんぐくゐ神寶也一かくさへしくるね　寄の
系一わくりりてざてゐ
一かちゐひくさのくさ
まくりぐ室まあぐりぱ世にゆるくくぐひあるも
とも
一かこまくとくる　緣
怠ちくゐ細とゐ初結くとゐんも
一かこ　りゐよ　寄ちるの神とパ右寄つ結れるを
ゐくりぱ栢原よ系ぱとるのくちくくをり

川奇別紙よあり　一かゝれたりんのこゝろまへ
唐織地の小紋也　一かゝをもちれたりハ練絹也
一かんるもち吉日なゝず　一かゝ寸すうれ物の合羽とて
春日ゝ也伊勢おりまゝす　ゝ也春日ゝ也ゝ紋
ゝや中文ハ必ス茶氏ゝる　ゝを紋ゝの中文ゝ古織
性の縫ゝ一ゝ　一かりづえゝて帯也
一かゝさゝゝめぎき　あやしゝ
一かゝゝ八路寺れ文次ハ功者のもゝ役也
一かゝさゝゝて地を早ゝあゝ寸ゝるゝゝ
さゝりく神也　一かゝれりげゝゝゝハ

あゝずや義人ゝ将院ゝて八別ゝ
のゝゝゝゝゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ服元の簾中ゝて
一かんるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
云物也　一かんすゝゝ　酥醉系
八ゝ系也舟系ゝ其別ゝゝゝゝゝ村ゝ記
和元年国二月十日ゝ宴舟系羹酥醉系
寺人口人ゝ又河水系ゝ云流ゝ
一かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一かせうとて　風ゝとのゝ
一ぬづゝひげ　髭鬚無ゝ
一ぬぎゝと　去年ゝ
とゝ寄のゝも
一ぬべの中ゝ
とゝも　遠壁　暗蚤　玄限　思　巣　寒燕
能脇　京天
水魚のゝも
蔭のゝづゝ
ぎとうけぬとも
一かんもんらく　海鼠
一ぬさゝり　ゝ
一ぬるゝ　動

一ぬとらの
一ぬゝの町　二の町　ゝ
一ぬやぐゝ
一ぬ多　姉
ゝく仏ゝ
一ぬゝ　庚申一ぬゝ
中ゝ
ゝゝ
のゝとゝ世のゝ
ゝふんも
ゝ人ゝ是　茶　并　袈裟　着

是人現生口中常に出す蓮花香一分毛孔中出
牛頭栴檀香一法華経一のまれさう　降魔相
不動の念怒のおとあらくろんろや
一のさうぞ　鶴也　宮殿うてハ後と見てうう
一のさうぞ　天雲　雲仏雲
とのんろ
生雲寺塔をこさせてうう　組髪ふ
一のしらのうえあくば　法華経の髪の毛
あくば分のげ生ぷう　らもとうあろんちとんも
一神ちど　神ふる心絵ふもちるべー

一かきうそと　一生勇猛
一風のまぎれ　地獄のかのほとゆのまぎれとうく
一のれも　不離也　一のくさう　ふよ生也
一かくじ　ちやけの動る　動命也
一のぜこうげよ出ほうつさあけつべき　文選宋玉
風賦曰壁石伐木摧殺林莽

帝國圖書館藏